

あるから、私の煩勞にならぬ程度のことならば諸君のいふがまゝになるつもりであるが、萬事を呑み込んでゐる楠窓君と相談して極めてもらひたいといつてやつて置いた。そこで上海に船が著いてから、「すみれ」會の堀場定祥君と楠窓君と相談の結果、郊外の戰場を一見して月廼家で晝飯を食べて、それから王一亭といふ晝家の家へ行つて、租界の繁華なところを一巡して歸るといふことになつた。

郊外の戦跡を見て月廼家に落付いたのは一時を過ぎてゐた。諸君と即景五句を作つて晝飯を終つたのは二時半でもあつたらう。王一亭の家を訪ふのは二時から三時までの間といふ約束であつたので、十六輔を通過してパブリック・ガーデンの前を過ぎて、二十四階建のブロードウエー・マンションや日本領事館や、サヴェート領事館などを過ぎて、舊城内の小南門の王一亭氏の邸に著いたのは三時少し前であつた。

門を入ると、ネーブルのやうなものをしやぶつてゐた二三人の男がそこにゐて、私達を一つの室に通した。そこで帽子や外套を脱いだ人もあつたが、私は寒いからその儘でよからうとのこと堀場君がいつたので、頸巻きに外套を著たまゝでまた別の大廣間に這入つた。外の諸君も一遍脱いだ外套をまたはをりながら續いて這入つて來た。そこには、向ひ合つた紫檀の榻が十脚ばかり

り並べてあり、周囲の壁には、古晝が隙間なく吊るされてあつた。枝の繼れたやうになつてゐる薄紅梅の鉢が一鉢と、紅い紙で根本をくゞつてある水仙の小さい鉢が澤山置かれてあつた。下僕が茶を運んで來たりする間、暫く榻の一つに腰を掛けて休んでゐると、そこに現れたのは王傳燾といふ名刺を出した一人の美丈夫であつた。それは王一亭氏の末子であるさうな。

先刻から萬事を斡旋してくれてゐる一人の日本人があつて、それは王傳燾氏とも心易く口を利いてゐる様子であつたが、それは大阪商船會社の支店長である井上正朋君であつて、王一亭氏の晝の弟子であることが、この時矢張り名刺を貰つたので判つた。

しばらく待つてゐる中に、王一亭氏が現れた。もう七十ださうで、品格のよい老大人といつたやうな風采を備へてをつた。一通りの挨拶が済んでから、私達を別室に連れて行つた。そこは晝室であつて、その周圍には、自分の描いた晝がひし／＼と懸け並べてあつた。眞中の大きなテーブルには、四角な石の鉢に墨の摺り溜めてあるのが置いてあつて、傍には澤山の筆が散らばつてゐた。王一亭氏はその前に老體を運ぶと、従者の一人は直ぐさま紙をその前に展べた。王一亭氏は筆を執り上げて一つの鶴を描いた。さうして其上に私に何か書けとの事であつたので、私は



といふ句を書いた。ほかにまた「鶴壽不知其紀也、高濱先生雅屬、白愁山人王震」と書いて、それを私にくれた。王震といふのは王一亭氏の本名である。又自分の寫眞と、自分の描いた二十四孝の圖の版本をくれた。

それから王一亭氏に別れて梓園といつてゐるその庭を見た。餘り廣い庭といふでもないが、真中に蓮池があつてその中に突き出てゐる一つの亭があつて、池の周圍は大湖石と稱へる支那の南畫によく見るやうな穴の開いてゐる白い石が澤山積み重ねてあつた。これを假山といふさうだ。その池の一方に宗廟と稱へる持佛堂のやうなものがあつて、王一亭氏はそこで朝夕佛に參するのださうである。その中に入つて見たのであるが、佛像は雜然と並べてあつて、堀場君の説明するところによると、これは佛像の良いものを選んでおいたといふ譯ではなく、佛像らしいものがあれば皆捨てずに並べて置くのださうである。王一亭氏は大變な佛教信者で、決して肉食はせず、菜食のみをしてゐるのださうで、自ら經營してゐる功德林といふ精進料理屋までがあるといふことである。

この庭には、たゞ隅の方に一本の可なり大きな梓の木が聳えてゐる。この木によつてこの庭園を梓園といふのださうである。私達がその庭を見物してゐる間も、王傳燾氏は常に慰勸に後につき添うてをつて、私達が自動車に乗る時も拱手して車の傍に立つてゐた。(大阪朝日新聞)

## 黄 浦 江

上海に上陸して、租界地を一巡した感じをいふと、自由な、賑やかな、朗らかな國際都市であるといふ感じである。支那の人力車夫が、喧しく車を勧めるのを、振り向きもせずには瀾歩して行く、支那のモダンボーイやモダンガールは銀座あたりで見ると、我國のそれよりも、もう少し活氣があるやうに見えた。また子供の手を曳いた老婆や、昔風の髪を結つて、ヨチヨチと歩く支那の女などがそれらに打ち混つて通つてゐるのも見た。かと思ふとまた西洋人の丈高い男女が、颯爽として歩いて行くのもある。自動車が通る。二階付きの電車が通る。それらを縫うて、一輪車に荷物を積んで引いて行く苦力や、一人乗の俥に二人のモダンガールが、一人は膝の上に乗つかるや



うな恰好をして、巧に合乗をしてゐるのが通る。租界の巡査は大概インド人であるが、そのインド人が頭に帛を捲いて、棒を持つて、町の要所々に突つ立つてゐて、その偉大な體格と、魁偉な容貌とで、巧に支那人を制して、交通整理をやつてゐる恰好は面白かつた。街路は概して廣いといふほどではないのであるが、それでも交通整理はこの體軀の偉大な、容貌の魁偉な、しかしながら概して人の好さうな印度人によつて保たれてゐる。

フランス租界は、道路の名前も佛語で呼んでゐる處が多いし、他の共同租界になると、英語、支那語が雜然と用ゐられてゐるし、バンドのあたりには、日本の領事館、サヴェートの領事館などを始め、各國の領事館が並んでをり、カセー・ホテルといふのは、インド人の大金持のサスーンといふのが經營してゐるといふことだし、そこにはまたブロードウエイ・マンションといふ二十四階建の高樓が兀として聳えてゐるといつた工合に、どことなく統一がないやうな、しかしそれでゐる上海といふ一つの町をなしてゐるところに、この町の特徴があるのである。

一度び租界のそとに出ると、昔風の百姓家が楊柳や竹藪に包まれて、麥畑の間に散在してをつたり、山羊が放し飼ひにしてあつたり、枯木の梢には、鵲の巢があつて、鵲がその上に止つてゐるのが見えたり、澤山のクリークがあつて、舢舨サムバンがその岸に繋がれてをつたり、石の反橋が見え

たりするところは、總て南畫の風景であつた。目のあたり、上海事件の戦跡はこれらの村に散見されたり、閩北の一部分の崩潰された家屋の跡に見られるのであつたが、今は何事もない田夫野人の生活を見るに過ぎなかつた。

さうして、支那人は大上海市政府といふ大きな建物を新しくその村の中央に造つて、大上海の建設を志し、租界の繁榮を市政府の手に取戻さうといふ、大計畫を進めてゐるといふことをもまた目のあたり見た。

が、もと／＼上海の町は、黄浦江といふ水があることによつて生まれたところの町である。この邊の大揚子江の水は殆ど海と等しい感じがするので、それはしばらく論外として、この黄浦江の水は何萬トンといふ船を自由に航行させ、幾百千の戎克や舢舨をその水上に浮かべ、河口から上海に至るまでの左右の岸には幾多の工場幾多の小街を點綴してゐて、それらは皆この上海を中心としての活動の現れをなしてゐる。黄浦江の水あることによつて上海の都市が生まれ、上海の町あることによつて黄浦江の繁華は形作られてゐる。黄浦江の水は汪洋として、人間の生活、人間の競争軋轢といふものは知らぬ顔に流れてゐる。江上の鷗は、科學の進歩には何の關係もないものゝ如く飛んでゐる。兩岸の桃が花を開き、楊柳が緑を垂れるのも間もないことであらう。



悠久なるかな黄浦江の水。(大阪朝日新聞)

## 旅だより

——立子へ——

船に歸つて寝て、其翌日又月廻家に行き、靖さんの稽古場である別室にゐて、もうまあ電話のかかる時分の十分許り前と思はるゝ時に月廻家の裏口から這入つて臺所を通つて電話口に行く。丁度電話がかゝつてゐて、靖さんがハローハローと言つてゐたが、其まゝ私に手渡した。受話機を取つて見ると女の西洋人の英語でハローハローといふ。それからクチャクチャといふが判らぬ。傍に立つてゐる上海郵便局長の嬉野波樓君に代つて聞いてもらふ。此人は波樓といふ號がある如く御手のものにて、ハローハローにて暫くして用が辨じ私に電話機を渡す。それからは話した通り。靖さんに揮毫して責任を果たした。御安心。鎌倉彫焼けなかつたもの花生け臺一つ。それに細君の帯どめ。

今日も波あり、ローリングもピツチングも相當にやるが章子元氣。章子今日は著物を著るといつてはじめて著物を著たり。

明日は臺灣海峡にかゝるはず、臺灣近しと思ふとなつかしい。

明後日朝、香港著とか聞く。(二月二十五日) (玉藻)

## 小さい国旗

船が横濱を解纜して、雑然たる部屋の荷物を章子が先きに立つて取片づけて居る時であつた。二つの小さい国旗を手にして、

「たけさんが此国旗を横濱で船の出る時分に振つて呉れと云つて、薫ちゃんに持たして寄こしたのであつたのに振ることを忘れて了つた。」

と、さう云ひながら、上の網棚に挿して居るのを見た。病床のたけしが態々心を籠めてこの国旗



をよこしてくれたのかと思ふと、それを望み通り手にして振らなかつたのは残念なやうな心持もするのであつたが、またあの混雑の場合、態々室に歸つて此國旗を取つて來る間もなかつたので、それも致し方がない事だと思つた。

それから船が名古屋に著き、神戸に著き、門司に著きする間も、この小さい國旗は依然として網棚に突き挿されたまゝになつて居た。さまざまのものが代り合つて其網棚の上に乗せられた。

玄海を渡つて居る時分に一時部屋を變へることになつて、私の居ない間に章子や女ボーイの手によつて荷物は大方運ばれたのであつた。今度の室は大分廣かつたので、其國旗も網棚には突き挿されず、他の處に置かれたのであらう、一向私の目には附かなかつたが、上海に上陸した時分に再びまた元の部屋に歸らなければならぬ事になり、俄の事であつたので今度は女ボーイに萬事を頼んで上陸したのである。どんな風に荷物が運ばれたか、亂雑になつて居はしないかと懸念しながら其夜船に歸つて見ると、多少齟齬して居るところもあつたけれども、大概なものが以前置いてあつたやうな位置にちゃんと置かれてあつた。二つの小さい國旗も元の通り網棚に突き挿されてあつた。

上海を出てから三日間茫洋たる沖を航海する許りであつたが、其三日目、一艘の船が行手に現

れた。章子と二人でしばらく此船を眺めて居つたが、甲板を歩いて居る中に、長谷部少將や横光利一君などと出會して、暫時雑談に耽り、この船の事は忘れて居た。ふと思ひ出してこの事を話すと、少將も、横光君も、私達の後に蹤いて甲板の前方に來た。其船は依然として遠くの方にあつた。もう此處から彼の船までは三湮位のものであらうから、見て居る中に此船と摺れ違ふやうになるであらうと長谷部少將の話であつたが、折柄晝食の鉦板ダイカシが鳴つたので、食堂へ下りて行つた。

食卓に著いて、機關長の楠窓君に、

「三湮ばかり先きに船が一艘やつて來て居ますが、摺れ違ふ時が見たいものだ。」

と話すと、楠窓君は直ぐボーイに、何時頃摺れ違ふやうになるか見て來いと命じた。ボーイが歸つて來ての話に、

「三湮ばかりありますから、此船が追つくにはまだ間がありません。」

との事であつた。あの船は向うから來て居るのではなくて、同じ方向に航海して居るのを、こちらの船が追つて行きつゝあるのが始めて分つた。

私達がゆつくりと、飯の後の雑談をも濟ませて、甲板に出て見ると、その船は最早や眞近くな



つて居た。折節甲板に在つた事務長と暫く話して居る中に、段々其船に追付いて、もつと其艦の方に居る人までがはつきりと見える距離になつて來た。其船は常磐丸と云ふ郵船の孟買通ひの貨物船であつた。聽て其船は汽笛を三度鳴らし、前檣に挨拶の信號旗を掲げた。こちらの船はやゝ遅れて汽笛を三度鳴らした。見ると其船では、艦に居る人々は盛んに國旗を振つて、大きな聲で歡聲を放つて居るのが聞えた。我船には甲板の手摺に西洋人が四五人立つて居る許りで、誰もそれに應じるものが無いやうに見えた。最も上のA甲板や、艦に居る人々はどうして居るか分らないのであるが、今私の立つて居るB甲板では馬鹿に飽氣ないやうに思はれた。そこで私はふと彼の小國旗を思ひ出して、章子に部屋に歸つて取つて來るやうに命じた。

章子が持つて來た二本の小國旗の一本を取つて私は振つた。一本は事務長が受とつて振つた。心からか、向うの艦に居る人々の國旗を振る勢ひが倍加したやうに思へた。唯二本の小さい國旗を振ることによつて、彼の人々の熱誠なる歡呼の聲に答へ得たやうな心持もした。其中向ふの船はだん／＼と遅れて、今はもう振つて居る國旗もさだかには見分け難くなつた。

たけしのくれた小國旗が圖らぬところで役立つた事を満足に思つた。船室に歸つて、また元の網棚に突き挿した。(東京日日・大阪毎日)

## 久 千 代

船が九龍の棧橋に著いて、それから香港に渡つた。英國の領地であるが爲に、總督官邸を始めとして、島の海岸から頂上まで連つて居る建物も、悉く英國風の餘りケバ／＼しくない、相當に古びてはゐるが、美しい建物ばかりであつた。島を一周して居るドライブ・ウェイも、堅牢な安全な路であつて、誠に英國の版圖であることを思はしめるに足るものがあつた。が、また翻つて往來して居る此島の住民を見ると、肝腎の英國人は數が少くて、廣東あたりの人であらうと思はれる支那人が多く、其商舖の連つて居る支那人町も殷賑を極めてゐた。私達は、晝には千客萬來の支那料理店に案内せられたが、晩には日本料理店に案内すると云ふ下田君の話であつた。郵船會社、商船會社、それに三井物産や三菱商事等の建物が、海岸通りの目抜き處にあるのを見たり、また、百貨店に入つて見て、その百貨店で賣つて居る品物の多くは日本物であることを見たりす



ると、聊か人意を強くするものがあるにはあるが、然しながら、日本人の此島に居る人は幾何位あるであらう。一寸見たところは日本人らしい人にはあまり出會はさなかつた。

その契約せられて居つた時間が来て、日本料理店に自動車を走らせたのは五時半頃でもあつたらうか。山の中腹の眺望のいゝところで自動車を下りると、千歳花壇といふ札の下つてゐる門があつて、其門を這入ると、下りになつてゐる石段があつて、勾配の急な山腹に建つて居る家の屋上に下りた。

私達は暫く其屋上に立つたまま、下の方に楕比して立ち並んで居る家を見下ろしたり、港灣の景色の美しいのを眺めたりしてゐたが、ふと見ると、其下に見える家屋もまた日本人の住居らしく、一人の日本服を着た女中が干物をして居るのが目に止つた。後で聞くとところによると、此邊は日本人の住宅が多いのであるさうで、先刻こゝへ来る途中で、四五人の女學生が歩いて居るのを見たが、あれは確に支那の女學生ではなくて日本の女學生であるやうに思はれたのも、成る程此邊が日本人の住宅地であるといふことによつて了解された。

その屋上には、躑躅の鉢などが置き並べてあつたが、其下には大きな椰子の木が一本突つ立つて居るのが目に著いた。私達は其屋根の上に出て居る穴の様な入口から梯子段を下りて、漸く

一つの座敷に達して、それからまた梯子段を一つ下りた處に行くと、やつとそこに一人の支那人が居るのに出會した。其支那人が妙な日本語を使つて人呼んだが、それは何と云つたか一寸聞き取れなかつた。が、直ぐそれに續いて、日本人の女の聲が聞えて、

「お八重姉さん」

と呼んだので、さきの支那人が云つたのも、お八重さんと云つたのであることが分つた。そこへ頸筋に白粉を白く塗つた五十許りの一人の女が出て來た。それがお八重さんであるらしかつた。やがてお八重さんは黙つて私達を導いて、一つの座敷に連れて行つた。

席が定まつてから、そのお八重さんが、お茶を運んだり、お菓子を運んだりしたが、スローモーションでなか／＼埒が開きさうにもなかつた。下田君は藝者を二人許り來るやうに云つたが、其時、

「この香港の藝者は、行儀も何も知らないひどい藝者ですよ。」

と、さう云つて笑つた。私は其言葉から、此邊まで流れて來た藝者の、人を人とも思はない阿婆摺れた無作法なぞんざいな口を利く女を想像した。

やがて、そこに一人の藝者が現れた。その藝者は、下田君とは馴れた口を利いて、戲談をも云



ふのであつたが、だん／＼聞いて居る中に、どことなく純な所があつて、少しも阿婆摺れたやうな感じはしなかつた。生れは何處かと聞くと、横濱との事であつて、私と同じく神奈川縣人であることが分つた。是は後の話であるが、この主婦も矢張り横濱の人であるさうで、自然この家の抱へとなつて來たものであることが領かれた。横濱は何處だと聞くと、元町だとの事であつた。

「元町なら章子の學校と同じだわ。」

「お嬢さんの學校は？」

「フェリスよ。」

そんな話をして章子とその藝者ともだん／＼打解けて行くやうに見えた。この藝者の名は松千代といふのださうで、自分から皺三十二だなどと戲談を云つて居たが、もう三十を過ぎて居るらしく、此家の抱への中でも姉さん株であるらしかつた。

酒が大分廻つて、下田君も楠窓君も、その松千代も、少し酔つたなと思ふ時分に、また一人の藝者がいつの間にか席上に來て居つた。この藝者は大分年も若く、名前は久千代と云ふさうで、青森の生れだと云ふことであつた。始めは口も餘り利かず、唯盃盤に侍して居ると云ふ風であつたが、それかと云つて陰氣な沈んだと云ふ方ではなく、下田君が戲談口を利けばそれには手際よ

く應答し、だん／＼其存在が明かになつて來るやうな心持がした。この女もまた先きの松千代と同じく少しも阿婆摺れたと云ふ感じはなかつた。

私は此時不圖、章子が船の中で暑くなつてから著る日本服を持つて來なかつたことを後悔して居るのを思ひ出して、先刻處々で見た支那の少女の服裝が大變氣が利いてゐることが頭に浮んで、支那服を一著香港で買つて行つたらよからうといふことを思ひ出した。ふと其事をいひ出すと、  
下田君も、

「それは良い思ひ付きですが、……」

と時計を見てから、

「もう八時を過ぎて居ますから、デパートは大方閉つて居るでせう。が、どうかならんかな。」  
と言つた。

「それでは仕方ありません。私が早く氣が付けばよかつた。」

と私は云つた。その時久千代は無造作に口を切つて、

「あたしの持つて居る支那服は、お嬢さんに合はないか知ら。」

下田君が直ぐ口を切つた。



「古びては居ないのか。」

「いゝえ、まだ一二度著たばかりよ。」

「さうか。それでは持つて来て見ろ。」

久千代はいきなり立ち上つて、自分の部屋の方に行つて、間もなく一著の支那服を持つて出て来た。それは好ましい色をした服であつた。

「著て見たらどうだ。」

と私がいふと、

「著て見ようか知らん。」

と章子もいつた。

そこへ丁度顔を出した女將が、

「お嬢さま。皆様の前でお著替へになるのもお厭でせうから、あちらの間へ行つてお著替へなさせ。」

章子は女將の云ふ通り別室に行くと、其あとについて、女將も、久千代も、松千代も皆立つて行つた。後で聞くと、三人がかりで支那服を著せて呉れたのださうである。笑ひながら出て来た

章子を見ると、支那服がよく似合うて、元來丈の低い方ではないのが、更に丈高く見えた。が、喉が少し小さくて、その紐が充分にかゝらぬといつた。

「それは夏服なの。」

一寸見ると暑さうなので私が聞くと、

「いゝえ、これは今頃著るのです。」

と久千代は答へた。

「新嘉坡から、印度洋に行くあたりに著せようと思ふのだから、もつと、薄つぺらなのがいゝのだが……」

「そんなら、もう少し薄いのもあります。」

と久千代はまた立ち上つて自分の部屋に行つた。今度出して来たのは、前のよりもまだ新らしさうな一著であつた。それは蟬の羽衣のやうに薄い絹の布であつて、美しい薔薇の模様が附いて居た。

「お嬢さま。この方を著て御覽なさいまし。この方ならば、喉もそれ程窮屈でないかも知れません。」



章子はまた久千代と一緒に別室に行つて著替をして居るらしかつた。そしてそこに現れて来た章子を見ると、前の支那服よりも尙しつくり身體に合つて、恰も自分の爲に誂へて拵へたものやうであつた。そして喉も窮屈でなかつた。

「お嬢さま。それで宜しければあげますわ。」

「だつて……」

「妾、要りませんから、失禮ですけど構はなければお使ひ下さい。」

傍に居た下田君が、

「さうか。久千代はまた拵へようと思へば、いつでも拵へられる。これは私からお嬢さんに上げますから御召し下さい。」

と云つた。先刻からの久千代の態度が感じがよかつたので、私は心持よくその贈物を受けることにした。

それから、この家の主人も出て来て、大きな硯に墨を磨つて、私に揮毫を請求したりして、大分夜も更けた。私は久千代の爲に小さい額面を書いた。

歸ることになつて梯子段を二つ上つて前の屋上に出ると、雨が降つて居た。又一つ階段を上つ

て往來に出て自動車に乗つた。その自動車の外には、濡れながら送つて来た久千代や松千代や、主人夫婦が突つ立つて居て、自動車の動き始める時分に皆頭を下げた。其中に久千代の姿が一番はつきりと眼に映つた。

これは其實、下田君の贈物になるわけであるが、それでも久千代が何の惜みも屈托もなく、自分の折角拵へてゐる著物を旅の我娘にくれたことは嬉しかつた。コロンボかマルセーユに著いた時分に何かふさはしいものを買ひもとめて、機關長の楠窓君に頼んで此船が歸る時分に久千代に贈らうかと思ふ。(中央公論)

## プラチナ・ブロンドの夫人

香港に一日船がかりをして居つたその翌日の朝の事であつた。私は睡眠不足の頭で甲板に出て香港の曉の景色を暫く立つて見てをつた。雨が降つて居たのであるが、明け離るゝ海の面には大



小の船が盛んに動き始めて居た。それ等の景色を見ながら、自分の部屋に歸らうと思つて、ドアを開けて見ると、さきには電燈を點して出た筈なのが眞暗であるのが少し變だとは思ひながらも、章子の寢て居るベッドには矢張り人が横はつて居るので、其儘半身を部屋の中に入れると私のベッドの方にも尙人が横はつて居るので、うろたへて身體を引いた。其時兩方のベッドでは物靜かに何かを話して居るらしい聲が始めて私の耳に響いて來た。私が其部屋に闖入して行つたにかゝはらず、別にそれを咎めるやうな様子もなく、矢張り靜かにその話が續いて居た。

這々の態で今度は本當の私の部屋に歸つて來たのであつたが、何にしても人の部屋に闖入して行つたと云ふのは失態であるし、殊にそれは外國人の夫婦らしかつたので恐縮した。そこへ女ボーイの八木さんが來たので、事の一部始終を話して、宜しく詫びて置いて呉れと頼んだ。八木さんは、

「え、よござんす。」

と軽く引受けて部屋を出て行つたので、まあ十分の三位は氣が休つた譯になるのであつた。それから一時間ばかりたつて、八木さんにひよつくり廊下で出會ふと、

「斷つて置きましたよ。」

と云ひ捨て、すた／＼向ふに行つてしまつた。まあそれで十分の六位氣が休つた事になつた。その後、その部屋に居る西洋人は五十位の夫婦の英國人であることが分つた。その夫人の方は、始めは白髪と思はれたが、それはプラチナ・ブロンドであると章子が云つた。

或る時階段を昇つて居ると、その階段の上に立つて、私の上つて行くのを待つて居る人があつた。それは狭い階段であつて、二人の人が行き違ふのは少し窮屈であるから、ボーイ等も客が上つて行く時分には上で待つて居るのが普通であつた。私は、早く昇つて其人を下ろさうと急いで階段を昇つて行つて、ふと顔を見ると、それはさきのプラチナ・ブロンドの夫人であつて、私の顔を見て笑顔を作つて、少し首を傾けてしなを作つて軽く會釋をするのであつた。私も覺えず一寸頭を下げて、

「有難う。」

と云つた。夫人はまたちつと私の顔を見つめながら愛嬌を作つて階段を下りて行つた。

それから、廊下を通るたびによくこの夫人に出會するのであるが、いつも愛嬌のある笑顔を作つて會釋をした。其主人なる人は一向無愛嬌で、素知らぬ風をして行き過ぎるに拘らず。

此事を章子に話すと、



「それは、お父さんが、態々斷りを云つたものだから、紳士だと思つてそんな風にするのかも知れないわ。」

と笑ひながら云つた。

それから氣が附いて見ると、その夫婦の食卓は私の食卓と餘り離れて居ない處にあつた。さうして、いつでも朗らかな笑ひが起るのは、その食卓の夫人の聲であることが分つた。緩やかな、調子の高い、それで少しも氣取つたところのない自然な笑聲であつた。その食卓はいつも其夫人の笑聲が中心になつて賑つて居た。その食卓のみならず、その笑聲の聞えることによつて、その周圍の食卓の人々までが軽い氣持になつて、愉快的談話に引き込まれるやうな心持がした。或る時章子が、

「森川さんの奥さんとあの英吉利人の御夫婦と、今までピンポンをしてほんたうに面白かつた。あのお婆さんが、あなたは何處まで行くのですかなどといろ／＼聞いた。向ふの云ふことは分るけれども、こちらから話すことは充分に出来ないで困つた。」

「ブロークンでも何でも思ひ切つて話して見ればいゝのに。倫敦にも行きますから、あなたのアドレスを教へて下さい、若しかしたら御訪ねが出来るかも知れないから、と今度會つたらさう云

つて御覽なさい。」

「さう云つて見ようか知ら。」

其後また甲板で散歩して居る夫婦に出會ふことも屢々であつた。そして二人が會釋を交すことも同様であつた。唯その主人公の方は、此頃は少しばかり首をかしげる位になつて來た。

此夫婦は男の方が四十七、女の方が五十一、英國の商人で香港から乗つたものであるといふことだけが分つた。(玉藻)

## 南十字星

私が南支那海を南へ／＼と日を重ねて航するに従つて、暑さが段々と増して來た。密雲が空を蔽うてゐた連日の不愉快な天氣が急にカラリと晴れて、日本の眞夏のやうな朝の光が左舷の甲板に當るやうになつた日であつた。甲板を掃除してゐる水夫達も、一齊に白服になつて、いつもよ



りは輕快に立ち働いてゐるやうに見えた。洗ひ清められた甲板に、白墨でデツキ・ゴルフの丸や直線を描いて行くデツキ・ボーイも、爽かな氣分に眺められた。

右舷の方に立つと、今まで何日かの間見ることが出来なかつた大陸が、洋上遙に見えて來た。これは安南のカムラン灣の見當であらうとの事であつた。乗客も大方甲板に現れて、互に挨拶を交し、手摺に凭つてこの安南の一端の陸地を眺めてゐた。が、見てゐる中にその大陸の一角も段と後に遠ざかつて行つて、遂に水天彷彿の間に見えなくなつてしまつた。

午後にまた左舷に一つの島が見え初めて來た。それは、なだらかな丘を持つてゐる、かなり大きな島で、その丘の中腹には畑と覺しきものが少しばかり見えてゐて、この島には人家のあることが想像された。大洋の眞中にあるこの島に住んでゐる人の、さびしい、呑氣な生活を想像して見たりした。

楠窓君の話に、昨朝七十度の温度であつた海水の温度が昨夜は八十度になつてゐるといふことであつた。空氣の温度は海水の温度とほど似よつたものださうで、現に私の部屋の寒暖計が八十二三度を示してゐた。晩食の時分に、傍の楠窓君に、

「南十字の星は未だ見えないですか」

と聞くと、楠窓君は

「さあ、もうそろ／＼見えるでせう。一等運轉士にさういつて、よく見える時分に知らせて貰ふことにしませう」

と、さういつて、メニューの裏にそのことを書いて、ボーイに一等運轉士の食卓に持たしてやつた。一等運轉士からは

「もう見えるはずですから、後刻御知らせに参りませう」

といふ返事が來た。ゆつくり晩食を濟ませて型の通り暫く雑談をしてから

「まだ運轉士からは何ともいつて來ませんが、ともかく上に上つて見ませう」

と、楠窓君がいつたので、横光君と私ら親子のそのテーブルにゐたものは、楠窓君の後に躓いて食堂の外に出た。そこには三四人の人が立つてゐて、それ等の人もまた、私達が南十字星を見に行くといふことを傳へ聞いて、ぞろ／＼と躓いて來た。

八九人の人はA甲板から更に階段を上つて、ポートデツキの、船橋の直下の處に行つて見た。南の方を見渡すと、水平線近くには、うつすらと雲が懸つてゐて、とてもこの鹽梅では十字星は見えさうには思へなかつた。そこへ一等運轉士が來て



「十一時から二三時ごろまでの間は、雲も晴れて星もよく見える時分であらうと思ひます」といつた。赤道近くに來たことによつて、南十字星が見えるといふことに興味を持つて集つた人は、小さい失望を感じたらしかつたが、晴れてゐる中天の星を仰いで、その寶石の如き耀きを持つた大きな星の光を見て、何れも驚嘆の聲を發するのであつた。中にも爛々と大きく耀いてゐる一つの星を指して

「あれは何といふ星ですか」

と聞くと、天狼星と答へた。またオリオン星座も美しい光を放つてゐた。北斗七星はこの邊からはもう見えないといふ事であつた。

乗 客 暑 し 南 十 字 を 見 ん と 集 ふ  
星 涼 し メ ー ン マ ス ト は 稍 か し ぐ

(大阪毎日・東京日日)

## 四 迷 の 碑

シンガポールの市街から長いアスファルトの道を過ぎてジョホールに差しかゝつた時分に、石田君は二葉亭四迷の墓もこの地にありますといつたので、私の心に蘇つたものがあつた。

さうだ。二葉亭は、漱石が朝日新聞社に入る前であつたか、後であつたか、暫く文筆に遠ざかつてゐたのが、珍しくも、飼犬のことか何かを寫生文風に書いて朝日紙上に發表したが、それから間もなくパリに行き、その前から入露の志があつたのが旨く行かず、健康も勝れなくなつて來たので、空しく日本に歸る途中、終にベンガル灣を航行中亡くなつたといふことを聞いた。二葉亭は原文一致の文章を、初めて書いた人として有名であつて、その「浮雲」といふ小説は、當時の青年に愛讀せられたものであり、その他、ロシアの小説をもつとも早く日本に紹介したのであつたが、自分からは決して文筆の士をもつてをらず憂國の志士をもつて任じてをつたやうであつ



た。二葉亭と私とは格別関係があつたといふ譯ではなく、たゞその歿後、ある人が二葉亭の俳句の草稿を私に示したことがあつたので、二葉亭もなほ俳句を作つてをつたといふことに興味を持ち、殊に私の仲間の句集「春夏秋冬」をも愛讀してをつたらしい記事があつたので、多少の懐みを覚え、「二葉亭主人の俳句の草稿を見る」といふ一文を、ホトトギス誌上に発表したことがあつたゞけのことである。その二葉亭の墓がこのシンガポールに在るといふことは今まで知らなかつた。

「それはこゝから遠いですか。」

「少し方向が違つてをります。」

近ければ一寸詣りたいものであるといつたが、方角も違つてゐるし、今日は時間がないから、それは明日のプログラムの中に入れて置いたらいゝだらうといふことになつて、自動車はぐんぐんとジョホール方向に進んで行つた。

さて翌朝八時に、船まで石田君がまた迎へに来てくれたので、私達は大意で自動車を日本人の共同墓地に驅つた。その墓地はシンガポールの町を離れた護謨の林の中にあつた。門を入ると、澤山の日本人の墓が並んでゐるのが先づ目に止り、その奥に粗末な木造の齋場があつた。そ

の傍に赤い鳥居の立つてゐるのは何であるかと聞いたら、それは稻荷の社であるとのこと、よく見ると、赤い旗も四五本立つてをり、佛桑花の花も赤い色を競ふやうにそのほとりに咲いてゐた。

そこに澤山ならんでゐる日本人の墓といふのは、内地で見るとあまり變りはなかつたが、その墓の臺石の下に、更に白壁で固めた三尺ばかりの高さの臺が一々くつついてゐるのが變つてゐた。

「二葉亭の墓はあれです。」

と、指されたところを見ると、それはゴムの並木の突き當りに立つてゐる「二葉亭四迷終焉之碑」と書いてある碑で、他の墓とは異つてゐた。

「船の上で死んでも水葬にしないでこゝまで持つて來たものでせうか、どうもこれは墓らしくないが。」

「いや、こゝへ埋めたものです。」

私達は暫く黙つてその前に立つてゐた。供へる香華もなかつたので、たゞ帽子を取つてその前に立つたのみであつた。ハラ／＼とゴムの木の落葉がする。耳を澄ますと、南洋鶯と呼んでゐる



鳥が鳴く。山鳩が鳴く。

飛行機が一臺飛んでゐる。非常に空高く飛んでゐるのであるが、熱帯の打ち晴れた青い空に極めてはつきりとその機體を見ることが出来た。あまり高いので、一寸見ると一處に止つてゐるやうに見えた。

時計が止つてゐることに気がついて、人に聞いて時間を合せて耳に當てゝ見ると、チクタクの音が非常にはつきりと響いた。境が静かなためであらう。

他の用事があつて、船に歸る時間が切迫してゐたので、護謨の並木傳ひに、だん／＼二葉亭の墓に遠ざかりつゝ自動車の止つてゐる方向に歩を移した。(大阪朝日新聞)

### 熱帯季題小論

シンガポールに来て、はじめて熱帯地に足跡を印した。草木花鳥の類は、ほとと想像してをつた

通りのものもあつたし、また想像以外のものもあつた。

俳句といふ、日本の本土で生れた、季題といふものを基とする特殊な文藝を、全く氣候風土の違つたこの熱帯地方に持つて來るといふことは、種々の點において支障を來たす。

「私達は一體季題をどういふ風に取扱つたらよいか。春夏秋冬の區別は殆どなく、年中暑いこの土地の風物を、どの季題をもつて詠つたらいいのか。」

と、かういふ疑問が、その地在住の俳人諸君に起つて來るのはもつとも千萬の事である。

今度の私の旅行は、歐洲の風物に接し度いのが主な目的であつたのだが、また一つは、かういふ悩みを持つてゐる、この熱帯の俳人諸君のために、その解決を見出し度いのも一つの願ひであつた。

何れ纏つたことは、後で「ホトトギス」誌上で發表する機会があると思ふが、こゝには簡単に今まで通つて來たところから得た、私の所見を述べて置かうと思ふ。

俳句はどこまでも日本の本土が生んだ文藝である。歳時記に規定されてゐる季題といふものは、多少の變遷はあるにしても、まづ大體において、動かすべからざるところのものである。この季題を根柢から打ち壊す時が來たなら、わが俳句は亡びる時である。



そこで、季題はどこまでも動かすべからざるものとして置いて、新たに夏の部に、熱帯といふ一部を設けてその熱帯の天文、地文、地名、動物、植物、著名な行事等は、そのものが暑い熱帯の季感を現はすものとして季題となり得るといふことにしたらよからうと思ふ。たとへば天文としては、赤道、スコールの類。地文としては、赤道直下、南北緯約二十度以内の各緯度、熱帯、南洋（日本で普通に使ふ南洋の意味。）の類。地名としてはシンガポールとか、ジョホールとか、彼南とか、コロンボとか、マラツカ海峡とか、ベンガル灣とか、インド洋とかの類。動物としては象、鰐、熱帯魚、極樂鳥、蝸等の類。（蛇、蝸牛、蜥蜴等の類はすでに夏の季題にある。）植物としては、護謨、椰子、檳榔樹、鳳凰樹、寶冠木、火焰樹、無憂樹、榕樹、月下美人、クロトン、ブーゲンベリア、ゴルドンシャワーの類。（佛桑花は既に夏の季題に入つてゐる。それから護謨紅葉、護謨落葉の類は、その紅葉とか落葉とかいふために、秋の季、冬の季のものにするのは間違つてゐる。これは一切護謨に屬せしめて熱帯、即ち夏季題に入るべきである。）特別な行事としては、馬來正月、（何とか特別の名前があるのであらうが假りにさう呼んで置く。）回々教の諸行事、嫁選び（シンガポールに、著飾つた青年男女が、海濱に出て互に配偶を選ぶやうな行事のあることを聞いた。）の類。

内地の季題に準據して熱帯の花鳥諷詠をしようといふことは、概ね不可能のことであつて、熱帯に住まつてゐる人々に取つては非常な不便を感じる譯である。ここに熱帯といふ一つの季題を確定することは、その不便を救ふばかりでなく、熱帯の俳人に限つて特に與へられた別天地を諷詠し得る譯で、これからその俳句に清新な寫生句を求め得られるであらう。

シンガポールの俳句會の兼題に「隴」といふ題が出てをたが、隴夜の感じは日本内地の獨得の感じであつて、その感じはすでに朝鮮に渡つても乏しいのである。熱帯地方にあつてはますますその感じは少ないものと思ふ。かういふ題で句を作るのは、日本を戀ふる感じが基になつてゐるものであらう。獨り、隴のみならず、雛祭とか、正月とかいふ類もその類ひであらう。それもまことにものともなことであつて、決して悪いといふのではないが、同じ作るにしても、椰子の葉蔭の朧月を詠すとか、煽風器の下に雛祭をすとか、汗を拭きながら正月をすとかいふことにして、熱帯地方のいつはらざる寫生をして、そのユニークな氣分を出すことに注意するがよからう。

また、内地の夏の季題に、片陰といふ言葉があるが、これは、實際來て見て、熱帯地方のために出來た言葉であるといふ感じさへしたのである。朝陰、木蔭等の季題も熱帯地方の季題として



新たに作られてよからうと思ふ。

まづ今まで通過した土地を土臺としての大體の熱帯季題觀といふものをこゝに概説して置く。行く／＼は一般熱帯居住俳人諸氏の協力を待つて、私の三省堂から出してゐる新歲時記改訂の時には熱帯の部を附加したいと思ふ。

附けていふが、臺灣、ハワイ、委任統治南洋諸島等も、大體これに準じてしかるべきであらうと思ふ。(大阪毎日・東京日日)

## 乞食が無い

石田君の語るところによると、馬來人は怠惰な民である。家もアダツプで葺いた木造の粗末な家に住むのだし、著物も薄い著物があればいゝのだし、食物もライス・カレーが常食だし、大した労力を費さなくても衣食住は辨じて行くのであるから、勢ひ怠惰になつて來たものであらう。

子供が生れると、椰子三四本と、芭蕉四五本を植ゑて置く。それはその子供一生を支へるに足る財産となる譯である。馬來人は、少し大きくなつて來ると、自分の齡を知らない。いつも大概同じやうな時候の連続であるから、一年といふ考が頭にはつきりとなし。それで、其子供の時分に植ゑた椰子の木の大きさを見て、大體自分の年齢を想像するのであると。

私の新嘉坡に上陸した日は、たま／＼一年の曆の更はる日であつたので、馬來人は赤や青の原色の晴著を著飾つて居た。それは男も女も殆ど同様の晴著を著けて居て、遠方から見ると女かと思はれるのが、近よつて見ると男であるのに驚いたことが度々であつた。また、道路を改修して居る人夫の中にも、晴著を著て居るものがあつた。尤も晴著と云つても、腰に纏うて居るサロンを云ふのであるが。

夕暮になつて、著飾つて居る馬來女が、椰子に包まれた家へ歸つて行く様子などは靜かな感じであつた。馬來の家は床が高く、女がたくさんある窓の一つから顔を出して、私達の行くのを見守つて居たり、其椰子の林の中から澤山の子供が走り出て來て、不思議さうに眺めて居る様子などは日本の田舎と違ひがなかつた。

私達が新嘉坡や彼南に上陸して、馬來人の乞食に一人も出會さなかつた事を不思議に思ふ。彼



南で、支那の寺の極樂寺に行つた時分に、その石段に、瘦せこけた、支那の女の乞食が一人居て、弱々しい目付きで私達を見上げて、靜かに手に持つて居る籠を差出したのと、歸り道に、その石段を上つて來る支那の老人の乞食が、これも物靜かに、帽子を私等の前に差し出したのを見たのであつたが、その他には一人の乞食にも出食はさなかつた。ジョホールの回々教の寺に行つた時も、乞食らしい者は一人も居なかつた。

全く乞食が居ない譯でもなからう。行く場所によつては乞食が居るのかも知れないが、少くともその數の少ないことは間違ひあるまい。是は何故であらうか。馬來人を怠惰の民族にする原因の、衣食住が安易である爲であらう。乞食とならなくても、三四本の椰子、五六本の芭蕉があれば、それで一生困らないと云ふのであるから。

馬來には月明かに乞食なし

(中央公論)

### 寄木細工のやうな小鳥

彼南を出て一日経つた時であつた。甲板に立つて海を見て居ると、何か漂うて居るものがあるのに氣がついた。何であらうかと思つて居る中に、傍に立つて居る二三人の人が、

「死骸だ、死骸だ。人間の死骸だ……」

「人にしては丈が短い。犬の死骸であらう。」

「いや人だ。土人であらう。」

「それにしては足が短いではないか。」

「足は鱧に食はれたのかも知れぬ。」

その漂うて居るものは、瞬く間に船の後になつて仕舞つたので、いろ／＼の想像を逞くする許りで何とも見究めることが出来なかつた。成る程人の死骸だと思へる節もないではなかつたが、



腐朽した大木が漂うて居たのか、椰子の株が流れて居たのか、大かたそんな種類のものではあらうと思はれた。

それから、船室に歸つて用事をして、再び甲板に出て見た。甲板には私より外に誰も居なかつた。一人で手摺に凭れて海の面を見て居ると、一疋の蝶の屍が浮いて居るのをちらと見た。

「あゝ蝶が浮いてゐる。」

と考へる間もなく、それも船の後になつてしまつた。果して蝶の屍であつたらうか。十和田湖では、蝶や蜻蛉の屍が、岸から一里許り離れた湖上に浮いて居ることが多いと云ふ話を聞いたことがあるが、この陸地を離れること遙な洋上で、蝶の屍を見ることは一寸有り得べからざることのやうにも思へた。

其時であつた。一羽の小鳥が舷側を飛んで行くのを見た。雀に似て尾の長い、どこかに白い斑のある小鳥であつた。其中見えなくなつて仕舞つたので、舳に行つて見ると、その帆索に止つて居るのが見つかつた。尾を少し動かしながら、頻りに四邊をきよろ／＼見て居た。ちつと見て居ると、其帆索をとん／＼と上の方に飛び上つて、また暫くの間、前のやうな姿勢をして四周を見廻して居た。其中、傍の別の帆索に飛び移つたが、折節甲板を馬穴を提げた炊事人夫が通つて

行き、また一人の水夫がとん／＼とB甲板の方に段梯子を上つて來たので、其鳥はいきなり艦の方に飛んで行つた。

私もまた艦の方に行つて見ると、その大きな通風筒にかゝつて居る鐵の梯子に止り、その梯子を傳うて、だん／＼と上の方へ上つて行くのが見えた。この艦の甲板には甲板船客の印度人が天幕を張つて、五十人許りの一團が居るのであるが、その天幕の隙から黒い手や足が見えて、今カレーの匂ひがさかんにして居るのは御飯の用意をして居るのであらう。

その鳥は少しもそこを動かぬので、私は機關長室に下りて行つて、楠窓君と或仕事にとりかゝつた。その仕事を終つて、また甲板に出て見たが、もう鳥はどこにも見當らなかつた。

その翌日であつた。朝がた甲板に出て見ると、また彼の小鳥が舳の方から艦の方に舷側を飛んで行くのが見えた。よく見ると、雀に似て嘴が長く、尾が長く、一寸寄せ木細工のやうな鳥であつた。彼南を出るとき此船に迷うて來た鳥であるか、また若しかすると、デツキ・パツセンデヤ1の飼つて居る鳥かも知れないと思はれた。(まはぎ)



## スピカですか

古倫母に明日著くと云ふ晩、私が機關長室に行つて居ると、そこに電話がかゝつて来て楠窓君が電話口に立つた。間もなく首席一等運轉士が手に星座表を持つてやつて来て、楠窓君と私に南半球の星座に就いて説明しはじめた。主として楠窓君が應接して居るので、私は机の上に頬杖をついてむづかしい星の名前を別に記憶しようと云ふ考もなく聞いて居た。唯南十字星とか、天狼星<sup>シリウス</sup>とか、カノパスとか云ふ名前は度々繰り返さるゝので耳に親しくなつて居た。今は月が出て居るから星の光が薄くつて見にくい、古倫母を出て二三日行つた處位からはよく見えるであらうとの話であつたが、やがて、

「兎も角御覽になりますか。」

と云ふので、私達は運轉士の後について遊歩甲板に上つて見た。

我船の吐いて居る黒い煤煙が躑き渡つて居る左舷遙に、南十字星が微に光を放つて居るのが認められた。それからやゝ離れて強い光を放つて居るキヤノパスや、舷側に半身を乗り出すやうにして仰いだ處に光つて居るシリウス等を見てから、右舷の方に廻つて北斗七星はどの邊にあるのかと搜したら、直ぐ目の前の大空になつかしい見慣れた形の星座が幅廣く横はつて居た。

「あゝ、北斗七星はあそこにありますネ。」

と、其美しい星の姿を暫く眺めてから、

「北極星は雲に隠れて見えないやうですネ。」

等と話しながら、其方角を見ると、見えたく、水平線から少し離れた處に、雲に隠れたり、また現れたりして、幽かに認められた。

それから北斗七星の柄の作る弧を延ばして行くと、アークチュラスと云ふ少し赤味を帯びた星に出會し、更に弧を延ばすと、今度はスピカと云ふ青い光を帯びた星に出會すと云ふ話を運轉士がしてくれたので、身體を舷側に凭せてその方向を辿つて居ると、

「スピカを見て居るのですか。」

と、一人の脊の高い西洋人が日本語で話しかけた。それがもとになつて、楠窓君と其西洋人の間



に會話が交換された。

その西洋人は、巴里の人であつて、横濱の根岸に七年許り住んで居るが、その根岸の住居は、山がなくて空がよく見えるので、そこでよく見る星の名を覺えたのであるさうな。今度半年ばかり巴里に歸つて來るので、佛領印度支那から瓜哇に渡り、それから新嘉坡に來てこの箱根丸に乗つたのだと云ふことであつた。楠窓君が私を紹介して、この息子さんが巴里のコンセルブートルに七八年も居て、今度國に歸ることになつたので、其前に一度歐羅巴を見物かたぐい巴里まで行くのであると云ふことを話した。息子さんは何處に住つて居るのかとの事を私に聞いたので、Saint Saëns の綴りを云つて、佛蘭西語ではどう發音するのですかと聞くと、サン・サーン あゝあすこですか、私知つて居ります、との事であつた。あなたは日本語が旨いですネと云ふと日本語は大變六かしいですと笑つた。

もう大分夜が更けたので部屋に戻つた。その夜は殊に暑い晩であつた。煽風機をかけたまゝで床に入つた。(擇)

## 東洋と西洋

——ヴユイルモルツ氏の標題を借りて——

三月三十一日ビュツセル氏のクラスの生徒たちの作品演奏會があるといふので、悴の池内友次郎、今度連れて來た娘の章子、宅夫妻、宿の主人の眷族などと共に、コンセルブートル街の舊國立音樂院演奏會場に赴いた。

會場の入口には、若い音樂者らしい人々がたちどまつてをつたり、婦人や紳士たちの入場するものなどが澤山に見受けられた。二階に上ると、ドアの入口に一人の背の高い、太つた老人が立つてゐて、友次郎がその人に挨拶してゐた。それから私に「ビュツセル先生です」と紹介した。かねがね聞いてをつた國立音樂院の作曲の教授にいままのあたり面會するのであつた。手にぎつて慇懃に迎へ、前の方の席にすゝめられたが、わざと後の方のあいてゐる椅子に腰をおろした。



見まはしてみると、あまり大きくない演奏場であるが相當古くたつたものであらうと思はれる品格のいゝ建物であつた。はや演奏が始まるところとみえて、正面の壇上には四五の男女が著席してゐて、話をする人もがやゝと聲を立てもせず、手をあてた口を耳もとによせてひそ／＼としてゐた。間もなく演奏が始つた。これはたゞ一人の聴講生の支那人鄭氏のトリオの作曲であつた。鄭氏はピアノの傍にゐて楽譜をめくつてゐた。曲がすむと聴衆が拍手をしてアンコールをうながした。鄭氏は少しはにかんだ様子で再び壇上に現れて挨拶した。

次はフリブレ氏の歌曲二つで、これも大に拍手を買つた。友次郎が樂屋で會つた時分に、「あそこにあるのが君のお父さんか」ときいたので、「さうだ」と答へておいたといふことであつた。

次はリテーズ氏の絃とピアノの五重奏で、このリテーズ氏は盲の青年であつて、恰度私の席のうしろに坐つてゐたが、演奏が一度すむとわれるやうな拍手で、ビュツセル氏がうしろから來て肩をつまみ上げるやうにして立ち上らすと、同じクラスの人々がつれ出したので顔を赤くしながら壇の下で挨拶をした。聴衆がまだ拍手を止めぬので、今度は壇上につつて挨拶をした。いち／＼書いてゆくのは大へんだから、あとは曲目と作曲者の名前だけを擧げると、レクス嬢

の絃の四重奏とオルグの伴奏の四聲合唱曲、デュトイユ氏の絃の四重奏曲、レミー氏のピアノとヴィオロンのソナタ、ランドウスキ氏の歌曲二つ、ドラビエ夫人のピアノ連弾曲、モリス嬢のセロの小曲二つ、メラン嬢の女聲合唱曲などがあつた。

以上の作曲を演奏する人は皆ブルミエ・ブリをとつた人、もしくは近く取り得る人であつて、それらの人が皆練習をつんで同じ學校仲間の人々の作曲を演奏するのであるから、潑刺とした元氣があつて、わからんながらも面白く聽かれた。作曲家も皆晴れの舞臺であつたから、アンコールのたび壇上に現れて挨拶をするのであつた。

今度は友次郎の作曲「序曲とアレグロ」を原智恵子が演奏するのであつて、演奏し終るとまた盛んな拍手が起つたので、友次郎と智恵子が並んで壇上に現れて挨拶をしたが、なほ拍手が止まらず再び呼び出されて挨拶をした。これは前の盲の青年に特に同情が集つたのと同じく、日本の音楽家といふ點に特別の同情があつてのことであらうと思はれた。

なにぶん初まる時間がパリの習慣で遅い上に、曲目が多くてまだ半ばに達したばかりで、しまひまで聽いてゐたら十二時になるであらうと思はれたので特に辭して歸ることにした。

この「序曲とアレグロ」は十日ばかり前の三月十九日に日本大使館における原智恵子の獨奏會



の時に、先生のビュツセル氏の作曲、デビュツシー、ショパン、シューマンなどの古人の大家の作品と並べられて演奏されたものださうで、丁度私が三月二十七日マルセーユに著いた時分に迎へに來た友次郎が驛で買った「キャンデード」といふ週刊新聞に、その時の批評が出てゐたといつてパリへ來る汽車の中で私に讀んできかせたのであつた。その批評の梗概をここにかゝけてみよう。この批評家はヴェイルモルツといつて今のパリ樂壇の第一人者であるさうだ。その標題が「東洋と西洋」といふので、それを私のこの文章の標題に借り用ゐたのだ。

今週日本大使館で非常に面白い音樂の催しがあつた。若い日本の藝術家、原智恵子が獨奏會をしたのだ。

日本人の模倣力、いゝ意味の模倣力は有名なものだが、原智恵子もその點やはり素晴らしい。技巧といふものから見た場合、どの西洋人の洋琴家に較べても一歩も劣らない。しかし外見の完璧な同化力に驚かされても、西洋人の感じた作曲を東洋人が如何に演奏するか。この内的問題になつたとき原智恵子が例の日本人の旺盛な同化力で、技巧と同じやうに西洋人になり切るか。日本

人の同化力が優秀すぎて東洋精神を忘れて終ひはしないか。この問題は重大であり興味がある。

西洋音樂にはとも角いろ／＼のものがある。いろ／＼の複雑さがある。そしてその複雑さも整頓されたものを土臺にして、非常に發展したもののだが、東洋音樂はすつかり違ふ、何か内氣な消極的なものが根本をなしてゐるのだ。ショパンやシューマンの浪漫主義とおよそ縁遠いものなのだ。しかし不思議なこと、豫想だにしないことが起り得るといふのは、そのショパンやシューマンの浪漫主義が内氣な消極的なものとしてやはらかな上品な東洋精神の上に巧に演奏されたことだつた。ビュツセルの「夜曲」とラザール・レヴィの「練習曲」が彼の女の見事な技巧で演奏されたのち、つひに池内友次郎といふ彼の女と同國人の作品が演奏されたのだつた。この日本の作曲家も演奏家と同様にパリの國立音樂院で西洋音樂の鍛錬を経て來た若者なので、外見の技巧といふ點ではやはり立派に西洋人作曲家に成り切つてゐる。しかも「日の出る國」の精神が焔となつて作品の隨處に輝いてゐるのだつた。これもわれ／＼西洋音樂の未來に大きな示唆を與へるものではなからうか。近代音樂が無意味に複雑化され理窟化されてゆく現代、新鮮な東洋趣味にあくまで忠實でしかも古典音樂のやうに何のごまかしのない音樂を聽くことができた。そしてそれが西洋音樂の知識を吸収し得た若い日本人の作品であつたといふことは十分注意すべきではなから



うか。

この日來てゐた多くの作曲家や洋琴家達は何物か大きな反省を得たはずだ、僅か一時間ばかりのお伽噺のやうな雰圍氣の中で、日本塗の美しいピアノの上で日本娘の原智恵子の美しい小さい指が軽やかに動いてゐるのを眺めながら。(大阪朝日・東京朝日)

## もう大概歐羅巴も判つた

私は先月の二十八日の夜巴里の此宿に落著いて、翌日遊覽バスに乗つて市中の主な建物を見物して、それから大使館に二度、大使官邸に二度、三菱商事に二度、上野義雄君宅に二度、音樂會に二度、佐藤醇造君宅に一度行つた許りであつて、コンコルドの廣場、シャンゼリゼーの通り、凱旋門などはもう度々見たが、一向に方角も判らず、印象もたしかで無い。其ほかは大概うちに籠つてゐる。

私は友次郎の宿の日の當らぬ窓から外を見てをる。空は見えない。唯中庭をへだて、澤山の窓が見える許りである。

私は其窓を見ながらも大概巴里は判つたやうな心持がしてをる。巴里が判つた許りで無く、歐洲全體が判つたやうな心持がしてをる。もうどこにも行く必要が無く、この儘歸つてもいゝやうな心持がしてをる。

が、友次郎の都合で六月末にこゝを發つて歸ることにしてくれないかとのことで、仕方なしに滞在してをる。十八日に發つて瑞西からハイデルベルヒに行つて高野素十君の下宿のあとでもたづねて、それからライン下りをしてベルリンに出で、倫敦に渡つて倫敦俳句會と倫敦のペンクラブの會合に出て、都合がよければ倫敦の田舎に居て、來月の中旬巴里に歸ることにしようかと思つてをる。けれどもこれも別に興味があるわけでもない。先づひまつぶしといった恰好である。

巴里といふ町に住んでをる人は十中七八はアパート住居ださうである。どこの町外れへ行つて見ても七階八階の家が軒を並べて建つてゐて、其一階宛に一家族若くは二家族が住んでをる。詰り一軒の家に數家族若くは數十家族が住んでゐるわけなのである。別に一軒を構へて住つてをる家族もないことは無いさうだが、それは餘程物持ちか特別の人で無ければ無いさうである。



巴里住居の多くの人は其アパートに住んで、二十四五から五十位迄人生の働き盛りをうんと働いて、金が出来たら田舎に引込んで、其田舎には家屋と田地とがあつて、其處で樂に餘生を送ることを目的にしてゐるといふのが先づ中流階級の人の理想であるさうである。いはゞ巴里は假の住居であつて、生活の戦をしに來てゐるところであるといふやうな感じである。

獨逸人はよく働く、佛蘭西人は獨逸人程働かないといふ説に對して、佛蘭西を辯護する人は、佛蘭西人もよく働く、唯佛蘭西人は人に使はれる場合はなまける傾きがあるが、自分の意志通りになればよく働くといふ。

そんなことをいふのが目的ではなかつた。支那人、馬來人、印度人、亞刺比亞人、佛蘭西人と其等の人の生活を見て來て、人間の生活は大概似寄つたものだ、といふ平等の感じが強くなつて來た。人間の幸福と不幸とは同じ程度のものであるやうな感じがするのである。到る所に佛様があり、到る所にクリストがあつて、人間は凡て平等を分け前どつてゐるといふ感じが強いのである。(釋)

## マテーズ氏

十年間パリに滞在して音楽を研究してゐる悴の池内友次郎の宿に落ちついたが、その友次郎の宿の主婦はスミス人を父としアルサス人を母として生れたのであつて、その生れたのは巴里であつたが、養はれたのはアルサスであり、獨逸語が達者だと云ふ話がかね／＼聞いて居つたのである。或る日、マテーズと云ふ獨逸人が私に日本の文藝に就て話が聞きたいと其主婦を通じて友次郎に話があつた。友次郎の説明するところによると、このマテーズと云ふ人は世界大戰後五年ばかり経つて後に、アルサス・ローレンの北部にあたるライン河流域地方にレナンと云ふ共和國が出来て、其所の大統領になつた人であるが、その出來たのは一千九百二十三年の十月二十三日であつて、翌月の十一月二十五日の夜から二十六日の朝にかけて忽ち崩壊する運命になり、佛蘭西に逃れて來て今日に至つたものであつて、今は新聞や雑誌に寄稿をして口すぎをして居ると云ふ



話であつた。私と面會するとなつても、その人は佛蘭西語は十分に話せないので、獨逸語で宿の主婦に話し、宿の主婦は佛蘭西語で友次郎に話し、友次郎は私にそれを話すと云ふやうな、廻りくどい手數を取らなければならぬ始末であるが、兎も角も面會だけはしようと云ふことを答へておいた。

いよいよ今日の午後二時に來るとのこと、一分と云ひたいが三十秒も時間を違へぬのが其人の習慣であるさうで、時計が二時を指すと同時に呼鈴の音がして其人がやつて來た。始め主婦と友次郎とが出て行つて暫く話してゐたが、友次郎が私を呼びに來たので出向いてゆくと、後向に腰をかけてゐたその人は私の足音を聞いて立ち上り、魁偉な面貌に笑みをたゞへて慇懃に握手をし、先づ私に會つたことを嬉しく思ふ旨を傳へた。つゞいて出て來た章子の手に唇をあて、それから席に復し、主として友次郎を通し以下の話をするのであつたが、主婦が椅子に腰かけたり傍に立つたりしながら、時に兩方の言葉を通譯して意味の足りないところを補ふのであつた。先づ巴里に來て何んな感じがするかと云ふ問ひであつたが、私は未だ巴里はろくに見物もしないと答へた。

まづ日本の詩の近代化と云ふやうな質問を發した。私は如何なる詩にも近代化がある。我が俳

句の如きも古い形を守りながら、常に新らしい方向に進みつゝあると答へた。俳句と云ふものは何う云ふ種類の詩であるかと云ふ問ひであつたから、私は先づ始めに、日本の四季の變化の正しく且つ現象の複雑美妙であることを話して、其四季の現象を描く詩であるが、作者の感情は深く内在して居て、其四季の景色を透して感情は諷詠されるものであると答へた。マテーズ氏は其は非常に面白いことと詩として極めて珍しいものであると言つた。

又マテーズ氏は四季の現象を詠するとなると俳句はレアリズムかとの質問であつたので、さうだ、四季の現象を詠する點ではレアリズムであるが、景色を透して感情を詠ふ點ではアイデアリズムであると答へた。マテーズ氏は、それで略々俳句の何物であるかと云ふことがわかつたやうな氣持がすると云つた。

それから俳句は古くからある詩かとの問ひであつたので、四百年ばかり前から起つた詩であつて、それは和歌から分岐したものである、和歌にも既に山の邊の赤人と云ふやうな景色を詠ふことに巧みな人があつたのであるが、俳句が生れるやうになつてから、それが専門的に俳句を作る人の手に移つたことをも話した。

それから友次郎をつかまへて音樂の話になつて、俳句を音樂に合はせて歌つたことがあるかと



のことであつたので、友次郎は嘗てパリのコンセル・ラムルーで自分の俳句を作曲した自分の曲が演奏されたことがあるといふ話をした。私に向つてあなたのはどうかと言つたので、私は無いと答へた。其時主婦はコロンビアの蓄音機に私の俳句の朗吟を吹き込んだものが友次郎の許にあることを話したので、然らば私に親しくその朗吟を聞かせてくれとのことだつた。私は俳句の朗吟は未だほんの試みであつて、此所で朗吟などすべきものでないと云つたがなかくきかないで、今こゝにあなたの子供もゐる、私たちもゐる、千歳の一遇であるから聞かしてくれと言つた。仕方が無いので私は「東山靜かに羽子の舞ひ落ちぬ」と云ふ一句を朗吟した。

今度は私の方から質問を持ちだして、私が航海してゐる時分に無人島を見ると其所の王様となつてみたいやうな氣持がしたことがあるが、あなたがレナンの大統領になつた時分の感じは何んなであつたか、ときいてみたところが、面白い質問である、と冒頭を置いて斯んな話をした。

世界大戦がすんで、どん底に陥つた獨逸の人間が食ふのに困つて大概ソシヤリストになつた。中にはミスチズムに陥つて巫孺の言を信ずるものもできて、民心がよるところがないありさまであつた。私は其場合にそれらの人間を導かうとして、毎日數百の人が集つてゐる所に立つて演説をした。雄辯の力は精神の力であつた。何も知らぬ大衆は雄辯の力に依つて動いて來た。私は

それらの人を救はんが爲に雄辯家になり、終に機運にのつて出來上つた共和國に推されて大統領になつた。それまでには、伯林政府の壓迫を蒙つてやむを得ず兵火を交へたこともあり、共和國の兵隊十萬人を擁するに至つたのであるが、遂に國際問題の關係によつて崩壊した。ゲーテの言葉に「人々には二つの魂がある」と云ふのがあるが、民衆を導くためには硬い魂が必要で、軟い方の魂には詩と音樂とがある。私もはじめは詩を作り、小説を作り、劇を書いて居つたが、遂に反對の方の力を用ゐたため政治の方に投じてしまつた。私は軟い魂の方を凡て硬い魂の犠牲にしてしまつた。私はクレマンソーとかポアンカレとかいふ偉い政治家と随分交つてゐたが、其人達に幸福な人は無かつた。自分は十萬人の兵隊を集めたけれども決して幸福ではなかつた。(友次郎に向つて)一萬人のお弟子のあるおとうさんは幸福である。私を今まで慰めて來たのは優い魂の妻であつたが、しかしそれも最近に死んだ。レナン共和國は短かゝつたが、しかしそれに就いての本は三千冊あつて、これには全部自分のことが出てゐる。ヒットラーは數日前レナンに關した人達全部を赦したが、しかし自分だけは赦さない。獨逸はヨーロッパ全部を征服しようとしてゐる。自分はヒットラーに反對ではあつても、獨逸人であるから獨逸の成功を祈つてゐる。あなたも是非獨逸に遊んでくれ。獨逸には活氣がみちてゐる。……それから話頭を轉じて、あな



たは個人として日本を如何に考へるかと私にきいた。

私は日本の政治のことは知らないが、しかし日本人は勤勉であると云ふことだけは云ひ得ると答へた。

マテーズ氏はすぐ引き取つて、獨逸も其通りである、全く同じである、残念ながら佛蘭西は其通りであるとは云へない、しかし獨逸は昔は詩もあり音楽もありうつくしい國であつたが、今は太鼓を叩いて行列をつくつて歩いてゐると云つた。

私は色紙に揮毫した残りが一枚あつたので、それを上げようと言つて差しだすと、マテーズ氏は立ち上つてわざわざ私に握手をして、私は筆蹟を集めるのが好きでよく集めてゐる、また一つ寶がふえた、といつて、友次郎に其句の讀み方意味などを聞いて、漸く椅子に腰をおろしてそれを靴の中に納めた。歸る時分にも其靴を突きだして、此中に日本の寶が入つてゐると云ひながら、自分の住居は郊外のムードンにあるから、そこにたづねてきてくれと再會を約し、握手をして歸つて行つた。(中央公論)

## 巴里句會

四月七日シヅイリイ街の佐藤醇造君が夕飯を食はすとのことで、友次郎、章子の二兒と共に出席した。松尾邦之助君も來て、食後句を作つて見ようとの主の提言で、それでは春の月が出てゐるから「春月」といふ題を出さうといつて五句づゝ作つた。

塔	見	え	て	樂	の	音	聞	え	春	の	月	佐藤綠水	
青	白	く	肌	を	照	ら	す	春	の	月	佐藤悦子		
鈴	蘭	の	花	賣	り	切	れ	ぬ	春	の	月	松尾邦之助	
春	月	の	あ	る	べ	き	夜	半	の	宴	か	な	友次郎
春	月	の	巴	里	の	都	の	寒	さ	か	な	章子	
我	宿	は	巴	里	は	づ	れ	の	春	の	月	虚子	



巴里で俳句會といふものがあつたのは恐らくはじめてでせうと佐藤君がいつた。

四月九日の夜、佐藤君が私の寓居まで見えて、十七日の夜日本人會で俳句の講演をしてくれぬかとのことであつたので、講演よりも俳句會をやつたらよからうと話して置いた。その時十二日の日曜にムードンの森に吟行しようといふことになつて、案内を出したのは、佐藤醇造（緑水）夫妻、横光利一、柴虚風、森脇襄治、松尾邦之助、宅孝二夫妻、平尾貴四男夫妻。

森脇襄治君は七日に發つて獨逸に行つたといふ通知がフランクフルトから來た。

切て當日になつてエツフェル塔の下に集つたのは緑水夫妻、虚風と私等三人許りであつた。

シャン・ド・マースの停留場から電車に乗つて、ムードンの停車場に降り、一寸マテーズ氏を訪問。後れて來た宅君と一緒に自動車に乗つて森に出掛けた。

天が俄にかき曇つて霰が降つて來て、森の中の道が見る／＼うちに白くなつた。自動車を降りるとそのまゝそこにあるレストランに駆け込んだ。レストランといつても立木に酒の廣告をぶら下げてゐたり、木の下に椅子を並べたり、先づ日本の掛茶屋程度のものである。が、寒いので無理に家の中に入れて貰つた。見ると一組の先客があつて、その組の椅子を片よせて私達の席を造

つてくれた。それほど狭いのである。そこで辨當を開いて食ふことになり、私達はサンドウイッチ、虚風君は卷餅、緑水君は握り飯に牛肉や午夢の煮べといふ程度で、互に交換して食つた。いつか霰が止んで日さへ當つて來たので、表に出て森の中を散歩し、暫く句作をしてをつたのであるが、また空がかき曇つて來たと思つたら霰が降つて來た。

再びレストランの中に駆け込むと、今度は更に二組の客と、更に大きなセント・バーナード種の犬を連れたい組の客が這入つて來て、身動きがならぬくらゐになつた。

約束の時間に自動車が來たので、歸ることになつて私の寓居に歸つて披講をした。

木	の	芽	萌	え	霰	降	る	な	り	パ	ー	ク	祭	緑	水
春	寒	き	茶	屋	の	主	の	欠	び	か	な	同			
小	鳥	な	く	ム	ー	ド	ン	の	森	の	木	の	芽	か	な
人	々	の	茶	屋	に	出	這	入	り	春	霰	同			
若	草	を	踏	む	吟	行	の	靴	の	鳴	り	虚	風		
春	寒	き	森	の	小	徑	の	し	ま	か	な	同			
向	ふ	か	ら	日	の	當	り	來	る	若	葉	徑	孝	二	



春霰過ぎて石露の葉光るなり 同  
 木の芽茶屋春の霰の賑やかに 友次郎  
 轉や四方の木の芽のそここゝに 同  
 木の芽萌ゆるムードンの森にかくれんぼ 章子  
 大空に燃ゆるが如き木の芽かな 同  
 いつまでもトラムプするや花の茶屋 虚子  
 欠びすぐ唄になりけり春の風 同  
 もの静かに花に情話やはばからず 同

芍薬の芽、蒲公英、堇、春草、春霰、春寒、冴返る、木の芽、花（櫻とは違ふが、杏の花は日本の櫻花のやうに多い。家の軒端にも咲き森の中にも咲いてをる。この杏の花をフランスでは單に花と稱へてもよからうか）等季節になるものは相當に多い。ムードンは巴里を距る十五分程度のところであるが、已に田舎の趣味は横溢してをる。巴里では決して俳句を作るのに困難は感じない。（東京日日新聞）

### ドーム寺院の鐘の音

四月十二日の日曜は復活祭の當日であつたが、私達五六人の者は巴里の郊外に吟行を試むべく朝十時にエツフェル塔の下で待ち合はし、シャン・ド・マースの停留場より電車に乗つて、ムードンの停留所を志して行つた。

目的はムードンの森にあつたのであるが、こゝへ來た序に、此地に假寓して居るマテーズ氏を訪問する事にした。尤も前に宿の主婦からマテーズ氏に豫め其事を通知して置いて貰つたのである。

五階六階のアパート式の家ばかりである巴里の町から、此田舎町に來ると、一軒建の家がぼつぼつあつて、芍薬の芽などの出てゐる庭を見るのが、恰も日本に歸つたやうで、大きな息が出来るやうな心持がした。マテーズ氏の家も、今は何も植はつて居ないが、可なり廣い畑を裏に控へ



た一軒家であつて、假の佗住居としてはまことにふさはしいものであつた。

案内を乞ふと、一人の青年が出て来て、親しげに友次郎と口をきいて居たが、それはマテーズ氏の長男であつた。ドアを開けて這入ると、寝巻姿のマテーズ氏が現れて、私達を喜び迎へたが、そこは起き出たまゝの寝臺が横たはつて居る狭い室であつた。いろ／＼話してゐるうちに、復活祭の前後は大變郵便が延著するので、まだ主婦からの手紙は受取らず、豫期しない訪問であつたので取り亂した姿をして居ることが分つた。私達は今日はムードンの森に俳句を作りに行くのが目的であつて、唯一寸敬意を表しに立ちよつた許りであると云つたのだが、マテーズ氏は頻りに留めるので、私達は椅子に腰かけたり、椅子の無いものは寝臺に腰かけたりして、氏を取り圍んで暫く話した。

その時、隣の部屋に聞えて居るラヂオは教會の鐘の音らしかつた。今日は復活祭の當日なのでお寺の鐘の音が入つて居るなど唯何心なく聽いて居たのであるが、氏が説明する所を聞くと、それは獨逸のケルンのドーム寺院の鐘の音である事が分つた。さう聞くと急に私の耳は注意深くその鐘の音を聞き澄ますのであつた。

この前も書いたやうに、このマテーズ氏は大戦後暫くライン地方の大統領であつた事があるの

であつて、それは極めて短い期間で、今の獨逸政府の壓迫の下に忽ち潰れてしまひ、巴里の郊外に斯かる佗び住むをして居て、新聞雑誌の寄書家として口を糊して居る境遇にあるのであるが、其後、氏の話の聞くたびに今のヒットラーとは相容れず、佛蘭西に亡命の客となつて居ても、心は常に獨逸の方にあるのであつて、今日の復活祭に當つて、ラヂオにケルンの寺の鐘の音を入れて居ると云ふ事は一抹の哀愁をそゝるものがあつた。

やがて其姪と云ふ、二十七八にもなる、此人は映畫の方に關係してゐるといふことであるが、其人が現れて、復活祭のものであると云つて、卵を青や赤で染めたものや、牛や羊の形をしたお菓子などを出して、私等一行の中に子供を連れて居つたものがあつたので、その子供に呉れたりした。

マテーズ氏は、私達のために日本のラヂオを入れて見ようと云つて、自分からラヂオの前に行つてダイヤルを調節し始めた。忽ちケルンの鐘の音は消えて、暫く雑音が響き始めたが、日本の音波は遂に何の響きをも傳へなかつた。

私達が辭して歸らうとする時分に、氏はムードンの森は大變寒い、また歸りにこゝに寄つたら熱いお茶を入れるからと親切に云つて呉れた。長男は表まで送つて出て、森に行く近道を教へて



くれた。この長男はマテーズ氏よりも丈が高く、髪を美しく分けてゐたが、年齢はまだ十七との事であつた。折節向うの町を曲つてこなたへ来る別の青年があつて、是はマテーズ氏の次男であるとの事であつた。マテーズ氏の話の中に、若し獨佛戦争が始つたならば、私の子供達は佛國の兵として出陣するであらう、私の甥達は皆獨逸に居る、従弟同士が戦場にまみゆるやうになるのも近いことかもしれんとの一節があつたが、その子供達がこれ等二人の青年であるかと顧みた。

その後私が獨逸を旅行した時分、ケルンの驛に下りて、一番に目に入つた大きな建物は、ドームの寺院であつた。其裏のドームホテルに泊つて先づラインの流を人家の向ふに望んだのであつたが、その晩も翌朝も私の耳に響き來つたのはドーム寺院の鐘の音であつた。それはマテーズ氏のムードンの佗び住居のラヂオで聽いた鐘の音と、少しも違はぬところのものであつた。ライン河沿岸は獨逸でも最も文化の早く開けた土地であるさうで、人口も稠密であるし、山野も美しかつた。さうしてホテルの前には太鼓を叩く音楽隊を先きに立て、ナチスの行列が強い歩調で大地を蹶立て、行進を續けて行くのを見た。

## ハイデルベルヒ

獨逸に行つたら、是非ハイデルベルヒに行つて御覽なさいと云ふことは、私の出發する前に素十君が云つた言葉であつた。私はその言葉に従つて、白耳義から獨逸に入つた時に先づケルンに一泊し、翌日はハイデルベルヒへと志した。

その途中、ライン河沿岸の景色は丁度梨や林檎の花盛りであつて、古城の點綴して居る山々を梨花村の上に望みながら、ライン河に沿うて汽車は上へくと進んで行くのであつた。

汽車がライン河を離れて、暫く行つた處に、ハイデルベルヒの町はあつた。平野がこれから谿谷にならうとする處にある小さい都邑であつた。

山の小高くなつて居る處に、シュロス・ホテルと云ふのがあつて、そこに泊つたが、ヴェランダに出て眺めると、小さいハイデルベルヒの町は一望の裡にあつた。ネツカ河と云ふ河が、町の中



央と云ひたいが、寧ろ町の片側を流れて居つて、瀬の音を立て、ホテルの丘の下を走り、それから市街に沿うて一筋に、遠く平野の方に去り、遂に山の麓を右曲して見えなくなつてしまつて居た。

ホテルの前には、千年以上の古い建物である、半ば壊れた城が聳えて居た。それは昔、此町を領して居つた王侯の住居であつたらうが、聞くところに依ると、ハイデルベルヒの大學も、六百年の歴史を持つて居ると云ふことである。此城に住つて居た王侯と大學とがどう云ふ關係にあるのか、それは聞いても見なかつたが、何にしても、ハイデルベルヒはこの古城を有しこの大學を有する、この谿谷の古い都邑であつた。

ホテルのバルコニーから見た町の家並は何れも同じやうな建物であつて、どれが大學かと直に見當がつくやうな建物は見えなかつた。が、とにかく此町に素十君は二年の間學問をし研究を續けて居つたのであると思ふと、何となく懐しく眺められた。

「若きハイデルベルヒ」と云ふ映畫が近頃日本にも來たと云ふことである。若い大學生が裏山に閉ぢ籠つて、教師に反抗する筋であるとか云ふ事を聞いた。その裏山は、このシュロス・ホテルの裏の方に當るのもあらうか。裏山傳ひに流れて來るネツカの水は、此間の大雪の雪解であら

う、黄色く濁つた水を忙しさうに流して居るのであるが、人の話に、ネツカの水はいつも斯く濁つて居ると云ふことであつた。

耳を澄ますと、小鳥の囀る聲が直ぐ窓の外に聞えて居た。大きな鴉が向うの山からネツカ河の上を飛んで、古城のあたりを掠めて行つた。遙に煙が見えるのは、遠く伯林の方から著いた汽車か、或は白耳義若しくば瑞西から著いた汽車か。地圖で見ると、こゝから瑞西の國境まではもう僅ほかない。瑞西に一遊したくもあるが、明日は伯林に赴くとしよう。

ハイデルベルヒの山水は美しかつた。その谿谷の小都邑は千年の歴史を傳へて、その山水よりも、より以上に美しかつた。

私は素十君との約を果たした事に満足を感じて、翌日發つて伯林へと志した。

木々の芽や素十住みけん家はどこ



## ビュルガ姉妹

四月二十五日、孫田博士司會の下に、伯林の日本學會で、俳句の講演會を開いた時の事であつた。私は圓い大きなテーブルの一端に位置を占めて、椅子に腰を掛けたまゝで講演すると、傍の椅子には仙石君が居て通譯の勞を執つて呉れるのであつた。他にそのテーブルを圍んで腰を掛けて居るのは、獨逸人もあり日本人もあつたが、その椅子には限りがあるので、他の多くの人々はそれ等の人々の後に椅子を置いたり、更にまたその後ろに居る人は前の人の椅子に凭れたり、後ろの壁に寄りかゝつたりなぞして、立つて居る人の方が多かつた。私の後の方にも椅子が二重か三重に置かれて、それにも人々が腰を掛けて居たが、其中には日獨協會長のベーンケ提督も居た。私は斯う云ふ講演會の模様を大變懐しく親みがあるやうに覺えつゝ、講演しながらも、その人の後ろに立つて居る聴衆の中に、男の青年に混つて女の若い人が三四人居るのが目に止つて、是は

伯林大學の學生であると云ふ事は略想像がついて居た。

講演が終つて、別室で一同が立ちながら、サンドキツチや菓子を掴み上げ、ビールのコップを片手に持ち、其邊を歩きまはりつゝ盛んに談笑の聲が捲き起つて居る時であつた。伯林大學教授の村田氏が二人の女學生を私の前に連れて来て、特に紹介した。それは、イヴォンヌ・ビュルガ、ジャンヌ・ビュルガと云ふ姉妹であつて、二人共日本語をよく話すが、殊に妹の方が達者であるとの事であつた。妹の方は姉よりも丈高く、明晰な日本語で、自分は一年半許り神戸に居つたと云ふ事を話した。そこへまた他の人が私の前に来て立つたので、妹との話はそのままになつてしまつた。

その席上で、こゝに參集した日本人が、明日、日本人會で俳句會を催す事になつたので、私は歸りがけにビュルガ姉妹に明日の事を話して、其席に来て見てはどうかと云つたら、有り難う、行きますとの返事であつた。

さて其翌日は人に誘はれてポツダムに出掛け、日暮になつて歸つて来て、日本人會に行つたのは定刻より少し遅れたのであるが、行つて見ると、多數の日本人の中に、ビュルガ姉妹もちやんと来て居る許りか、同じく伯林大學生であるエリカ・フース嬢と、多年日本に居つて、日本の下情



に通じ、日本食の通であるルンプ氏も来て居た。一同が食事をする場合になつて、ルンプ氏は固より、其等の獨逸人の娘さん達も箸を器用に持つて日本食を喰べるのを見た。

その後、俳句を作ることになり、課題は「春寒」、「木の芽」、「春風」であつたが、ルンプ氏とフース嬢はまあ見て居ませうと云つて句は作らず、ビュルガ姉妹は指を折つて數へながら十七字を並べて居る模様であつた。

五句宛投句をするのであつたが、ビュルガ姉妹もちゃんと五句投句した様子であつた。扱て互選も濟み披講に取りかゝると、他の人の選句の中にもぼつ／＼姉妹の句があつたやうであつたが、私の選句の中には、

春 風 の 日 本 な つ か し 今日 思 ふ

と云ふイヴォンヌ・ビュルガの句があつた。席上の人皆手を叩いて囃した。イヴォンヌは顔を赤くして友次郎の方を見て笑つて居た。後で聞くと、それは友次郎が多少直してやつたのださうだ。妹の方は出なかつたが、然し後に友次郎が示したジャンヌの句稿の中に、

木 の 芽 出 で ざ れ ど 寒 さ ま だ 身 に し む

といふのがあつた。調子が五七五になつて居ない許りで、ちゃんと十七字にはなつて居るし、殊

にこれは伯林近傍の寫生であつて、採つてもよかつたと思つた。

外國人に日本の俳句を作らさうと云ふには餘程の努力を要する。第一其人が日本語に熟達して居なければならぬ。それに日本の氣候風物にも親炙して居なければならぬ、そののみか、日本人の春夏秋冬に對する特別の習俗をも了解して居なければならぬ。その上また、文字の調子の面白味をも知らなければならぬ。外國人であつて是等の事を具備して居る人は殆ど絶無であると云つてもよい。その中であつて、ビュルガ姉妹の如きがあるのは先づ珍しいとせねばならぬ。

然し、惜い事には、私達は其翌日もう伯林を發たねばならなかつた。ツォー停車場に私達を見送つてくれた人々の中に、ビュルガ姉妹もまた混つて居た。さうして、姉妹から私の伴れてゐる章子に人形を呉れた。私は姉妹に勉強して續けて俳句を作つて御覽なさいと云ひ、姉妹は笑顔を作つてうなづいたが、何だか名残が惜まれた。(中央公論)



## 巴里マゼスチツク旅館より

——年尾へ——

パリを出てベルギーのアントワープに行き、その領事の招待宴で俳句會を催し、それから獨逸に這入り、ケルンに一泊、翌日はライン川に添うてハイデルベルヒに行き素十君の學窓のあとをたづね、其翌日ベルリンに直行、ベルリンでは獨逸人半分、日本人半分の四五十人の人に俳句の講演をし、翌日は日本人會で俳句會を催し、五日滞在の上、和蘭から船で倫敦に渡り、シエクスピアの生れたストラットフォードに行き、シエクスピア・ホテルで晝食をしてゐると、同地のシエクスピア劇場に出演する俳優の一團の會食するの逢ひ、シエクスピアの家、墓等を見、ウインザー宮殿を過ぎて歸つたのが一日、キュー・ガーデンに吟行したのが一日、グリーンニツチの天文臺邊へ出掛けたのが一日、トラファルガー街の國立美術館に二度行き、ブリチツシ・ミュージアムに一度行き、其間所々に招宴、俳句會。五日にはペン・クラブの招待會に出席し、六日に

ドーバー海峡を渡つて巴里に著き、すぐ其夜「ハイカイ」の古き作者ジュリアン・ヴォーカンス氏に招かれ、俳句談をし、今夜は又五六人のハイカイ愛好者と會合のはず。明日乗船。船の上で詳しく筆記してもらふつもり。大略右まで。(摩耶)



# 洋行雜記

## 和服

今度の旅行は和服を着て行つたのであるが、私は何にも西洋を和服で歩くといふのが得意な譯でなく、必要があれば洋服を着ても差支へないと思つてゐたのであるが、和服で一向差支へがな  
く、格別不便を感じなかつたのでそれで押通して來たといふまでである。つまり不斷着のまゝで、



不斷著のまゝの心で一才ヨーロッパを覗いて来たといふまでである。しかし、西洋を和服で通つて来たといふ事實について多少の感想談のないこともない。

港に船が著くと、誰も争うて上陸するのであるが、その場合袖がタラップの手摺に引つかゝつたり、袴の裾を踏んだりするには多少の不便はある。しかしそれも、慣れて来るとそんなへまはやらす、輕快にタラップの急勾配を昇降し、ランチに飛び移ることも出来るのであつた。そして、一旦上陸して陸地に立つた場合は、少しも日本の内地における時と變りはなかつた。支那人馬來人、インド人、アラビア人の類も、物珍しさうに私の服装を見、殊に草履をはいてゐる足元を不思議さうに眺めるのであつたが、フランス人でも、ベルギー人でも、ドイツ人でも、矢張り同じく服装、殊に草履を不思議さうに凝視するのであつた。しかし、それらの人は少しも輕蔑の眼を向けるものやうには感ぜられず、唯珍しい物に出會つたといふ好奇の表情に受取れた。つまり、田舎者が見慣れぬものを見て眼を睜るのと同じものやうに受取れた。ベルギーとかドイツの田舎に這入ると、寄つてたかつて目を圓くして見てゐるといふ事からでも、それが物に見慣れぬ田舎者の心理であることは證明せらるゝのである。パリ人は或意味において田舎者である。かれ等は自分の國、自分の都會、自分の流行があることを知つて、他に如何なる國があるかを知らぬ者が多いのである。

さすがロンドンには、往來を歩いて見ても、あまり人のなり恰好を凝視するものは澤山なかつた。かれ等の眼が、日本の服装を見慣れてゐるためでは必ずしも無からうが、少くとも自分達と違つた服装のものが世の中に存在してゐるといふことくらいは承知してゐるのであらう。實際、各種の民族が、その街路を大手を振つて往來してゐるのを見るのである。

ロンドンのペンクラブの招宴には、私ははじめて紋附の羽織を著て出席した。横光君も駒井君も同様であつた。いつも和服に深ゴム靴を履いてゐる駒井君も、この日は草履をはいてゐた。いはゞ、正装したと云ふ恰好であつた。童子も和装で出席した。しかし誰もそれを不思議がる様子はなかつた。この席上には各國の人が集つてゐたが、各國の人が各國の服装をして集つてゐるといふことに、何等の不思議もないといふ感じが、全會員の頭にあつたことであらう。

船の上でも熱帯地方にかゝると暑さに堪へられなくなつて、西洋人がだん／＼上著を脱ぎ、チヨツキを脱ぎ、シャツ一枚になつてそれに半ズボンをはき、毛脛を露出して食堂に出席するやうになる。女もブラウスを著て半ズボンで太腿を出して出席する。私は、浴衣に袴をはいて出席することに極めた。浴衣がけで袴もはかずに出席したところで、かれら西洋人の服装よりは禮儀正



しいものと考へたが、しかし袴だけは著けることにした。少くとも日本の船では、そのうち、西洋人達もだん／＼日本人の眞似をして、浴衣がけくらゐで食堂に出席するやうになることであらうと思ふ。さういふことが、早晚必ず來るべきであると思ふ。

日本服は、日本人が著るべき自然の要求があつて出來たものと考へる。世界に持ち出して堂たる服装であるが、たゞ、それを見慣れぬ田舎者が驚嘆瞠目するだけのことである。

著物、羽織につける定紋はそれ／＼の家柄を象徴してゐるものである。家名を尊ぶ武士的精神の今もなほ全く地を拂はぬことを、この定紋によつて見ることが出来る。聞くところによると、日本以外の國で、家柄を現す服装はスコットランドぐらゐのもので、そこではクランと稱する格子模様でその家柄を現すとかいふことである。

しかし私は、こんなことをいはんがために和服を著て行つたのではなく、いつでも必要があれば洋服を著ようと思へてゐたのであるが、少しもその必要を感じず、不斷著のまゝ和服で通すことが出來たまでである。

## 海上生活

今度の旅行は全體で百廿日間であつたが、その中八十日間は船の上で暮したのである。従つて今度の旅行の経験は、主として海上生活の経験であつたともいへるのである。

私等伊豫人の血液の中には、藤原純友の血が混つてゐるといふことを、戯れにいつたことがあるのであるが、純友でなくとも、鎖國以前の我々の祖先は、小さい舟に棹さして狂瀾怒濤をくゞつて遠く大陸の方から南洋の方面に出た経験があるのである。自然我々の血液の中には、海洋を喜ぶ遺傳性がどこかに潜んでゐるのかも知れない。玄海や臺灣海峡などで、多少の動搖を覺える時には、何となく心の底に一味の快感を感ずるのであつた。

春 潮 や 窓 一 杯 の ロ ー リ ン グ

ローリングばかりではない。ピッチングも加はつて、一萬餘噸の船が盪を廻すやうに荒浪に翻



弄せらるゝ時でも、甲板に立ち、手摺によりながら、大空の星を搔き廻すやうにメインマストが揺撼するのを見ることに、一種の痛快さを覚えるのは、私かに祖先の靈と相通する或物があるのであらう。

海上生活者としての、水夫や火夫を見てみると、その職務に忠實に、蔭日向なく働いてゐるのが涙ぐましく感ぜらるゝのである。狂風の吹く中に、マストの上に登つて、身體を縄で縛りつけて、孜々として作業してゐる水夫や、百二三十度の暑い汽罐室に入つて、シャツをビショ／＼にして蒼い顔をして、喘ぎながら甲板に出て来る火夫等を見る度に、愉快な航海を續けてゐる乗客達は何れも感謝の念を起さぬものはあるまい。スエズの運河で、待ち合せてゐる間に、澤山の船が通過するのを見てゐると、國籍はさまざまの、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、スエーデン、ノールウェー等の船の、何れもその本國に近づくのを喜ぶ乗組員一同の嬉しさうな顔が甲板に並んでゐるのを見たのであつたが、またわが船の故國に近づくに従つて、乗組員一同の氣勢が頗る高まり、水夫、火夫、ボーイ等の行動が一層敏活になるのを見受けたのである。海上の生活者も望郷の念は絶えずあるといふことは看取せらるゝ。

聞くところによると、英國人などには、可なりな老船長、老機關長があつて、それ等は別に海

上生活を苦痛とせず、口笛を吹いて快適を感じながら、その職を續けてゐるものが多いといふことであるが、日本人になると、さういふ人が極めて少く、その原因は種々あるであらうが、要するに船員の心が満たされないといふことに歸するのだといふ事である。さういふこともあるであらうが、アデンのやうな砂漠地帯や、シンガポールのやうな熱帯の土地から、故國日本の春花秋月を心に描いて、郷土愛著の念に驅らるゝのも大きな原因であらうと思はれる。私達祖先の血液の體内に潜在してゐるものを活かして、今後至るところの海洋にわが船を浮べ、各國の港灣には數艘の船の繋つてゐないところはないといふくらゐになる時が来るためには、船員をして、心から楽しんで海上生活を續けるやうな風に、當事者が意を致さねばならぬことであらう。

今度八十日の船旅を同じ船の箱根丸で續けた間に、計らずも俳句會を催すことが度々であつて、はじめは乗客の間に多く行はれたのであつたが、しまひには乗組員の間に數度催され、それが多少の慰安になり得たといふことは、無意味なことではなかつたやうな氣持がするのである。海洋生活者の心を満たすといふことの上には、なほ大きな問題が伏在してゐるのであつて、俳句の如きは洵に九牛の一毛といはねばならぬのであるが、その九牛の一毛の俳句ですらも、船長機關長が身をもつてこれを率ゐたといふことのために、ボーイや水夫に至るまでが四季現象の上



に心をとどめるやうになり、一種の和やかな氣持が船中に漲るやうになつたといふことは、私も喜ばしく感じたところである。

## 縁

幅の廣い車道の左右に並木があつて、その左右に人道があつて、また並木があつて、その左右に更に二三間の歩道があつて、四五階乃至七八階の高樓が櫛比して建つてゐるのが、ロンドンやパリやベルリンの目貫の場所の概観である。日本でも東京の丸の内界限、大阪の中之島界限などはやゝそれに近いともいへるが、しかし概して家が矮小で、電信柱ばかりが高くて、道が埃りばくつて、西洋の都市に比べると貧弱だ。

がしかし翻つて考へると、その西洋の立派な建築の中には、一軒のうちに數家族乃至は數十家族が住つてゐるのであつて、たとひ小さい建物であつても、一軒を一家族で占領してゐるのは數

へるほどしかない。従つて各階に一家族か二家族が住つてゐて、エレベーターで何階かに昇つて行くとすぐそこに一個以上のドアがあつて、その一つのドアのボタンを押すと直に女中か主婦が現れて、そこを這入るともう客間か居間かである。

部屋の窓を開けると往來かもしくは内庭が見下ろされる。日光も朝のうち一寸當るか、夕方になると當るか、もしくは一日當らぬか、何れかであつて、窓に首を出して伸び上ると僅に空を見得るといふ有様である。室内から外部に通ずるにはさつきのドアと、この窓があるばかりであつて、窓から出ようとすれば墜落して命をなくするから、勢ひドア一つが僅に外部との通路である。

一寸見た所では、七八階の高樓は市街の美觀をなすやうではあるが、その内部に住つてゐる人のことを考へると、これが果して幸福なる生活であるかどうか。

しかしそれらの都市に住つてゐる人々はすでに數百年の年處を経て、さういふ一室に生れ、其處に生活し、其處に死んで行くのであつて、さういふ祖父を持ち、父を持ち、また子や孫をも持つ人々である。

私達日本人から見ると、東京の上街（うへまち）あたりに見る邸宅の大きな扉をめぐらした一廓の、その中



には鬱蒼たる樹木が茂つてゐて、其間にある家屋は矮小なる日本家屋であつても、そこには廣々とした庭があつて、その庭と座敷とを結びつける廣い縁があつて、人々はその縁を通つて沓ぬぎに下り、そこにある下駄をつゝかけて直に庭の踏石の上に下り立つことが出来、日光は惜しげもなくその縁に當り、室内は明る過ぎるくらゐ明るい、さういふ邸宅に住つてをる人の方をより多く幸福なものゝやうに考へる。獨り上街の大邸宅ばかりでなく、邊鄙の裏長屋であつても、なほこの縁側なるものは必ずあつて、そこに足をぶら下げたり、足先でぬぎ散らしてある下駄をさぐつて直に庭に下り立つて、花鳥風月に直に接觸し、かれ等西洋の都會人の夢想だもしない幸福なる天地を領有することが出来る。

パリ、ベルリン、ロンドン等には、<sup>せむし</sup> 僂と<sup>あしたへ</sup> 蹇とか、<sup>あしたへ</sup> 蹇とかいふものが多いが、これは日光の不足するための病人であるとかいふことである。それは窮極するところ、縁を持たぬ家屋に住んでゐるといふことに原因する。日本民族の住居の幸福は一にかゝつて縁にある。

東京あたりでも近ごろはアパートが出来、西洋の生活の模倣者を盛んに生みつゝある。それは縁をとり落した當事者の過失である。オフィス街のビルディングは止むを得ないであらうが、ただ住居はどこまでも廣い庭を有し、茂つた木立を有し、縁を有する木造建築の舊態を守りたいも

のである。それが西洋に類のない日本の都市の美觀を保つ所以でもあらう。高層建築のみが決して美觀ではなからう。

## 行人旁午

パリではベルサイユの宮殿とかルーブルの博物館とか、一番に旅行者の見に行くところは格別見たいとも思はなかつた。しかし機會があれば見に行つてもいゝと思つてゐたが、別にさういふ機會もなかつたので見に行かなかつた。ベルサイユに行く途中のムードンの森へは十人ばかりの同行と俳句の吟行に行つた。その足をちよつと延ばさへすれば何でもなかつたのであるが、しかし森の中に咲いてゐる杏の花とか、近傍の草の中に咲いてゐる蒲公英などに氣をとられて、その氣にもなれなかつた。ルーブルの博物館の前は何度も通つたが、しかしそこに立寄つて泰西の名畫を觀賞しようといふ熾烈な欲求にも驅られなかつた。



英國の學生達が丁度エツフェル塔の見物をすまして嬉々として下りてくるところに出會つたこともある。私は三週間ばかりこのエツフェル塔に近い町に住んでゐたので、その塔下を逍遙したことは度々であつたが、少しも塔に昇つて見たいといふ希望は湧かなかつた。それよりもトロカデロの宮殿が破壊されつゝあるのを遠望することの方に興味があつた。何ゆゑこのトロカデロの宮殿を壊さねばならぬのか。それは來年であつたかに催される博覽會の敷地が狹隘のためであるさうで、立派な宮殿を無造作に壊す所にパリ人士の誇りがあるのかもしれない。日々にダイナマイトで壊されて行く宮殿の模様を遠望するのが面白かつた。

英吉利でも逢ふ人毎に DO YOU SPEAK ENGLISH ? と聞くのが一番最初の言葉であつた。私はたゞ首を横に振つて相手の顔を見た。ベンクラブの幹事のオールド氏もさうであつた。チェアマンのバイング氏もさうであつた。誰もがよりつく島がないやうな表情をして私の前を立ち去るのであつた。

パリの宿の主婦はフランス語はもとよりのことだが、またドイツ語も話した。私にフランス語は話さないのかドイツ語は話さないのかと疊みかけて聞いたが、私は矢張り前の如く首を横に振つて相手の顔を見てをるばかりであつた。悴の友次郎が通譯をして、萬事はすんだが、それでも

友次郎のゐない時は、双方無言のまま飯を食つたこともあつた。居るうちに絶えず使はれるフランス語は耳になれては來たが、しかし一向それを覚えようとも思はなかつた。私は「私がフランス語を覚えるよりもあなたが日本語を覚える方が早いだらう、あなたの方が年が若いから」とさういつて黙々としてゐた。主婦は章子にフランス語を教へるかはりに、章子から日本語を教へるべく二人とも帳面に兩國語の對譯を書いて勉強してゐた。

私はパリの宿に著いた翌日から日本食を宿の主婦に請求した。主婦はおかゆのやうでしかも心のある御飯を炊いて、それに鹽で味をつけたりしてゐたが、終には「これはよく出來た」とほめてやるくらゐの御飯を炊くやうになつた。お茶も日本の罐詰などを賣つてゐる食料品屋に章子と共に行つて梅干が五つか六つはひつてゐる壘を日本金にして一圓餘りで買つて來たりして騒いでゐたが、しかしどうやらまづいなながらも日本のお茶のやうなものを食べることが出来るやうになつた。フランスの習慣で、同じものを何度でも強ひるのが禮式と心得てゐるので、同じ茶を二度も三度もすゝめるので「もう澤山」といつてそれをしりぞけるので「もう澤山」といふ言葉だけは主婦も終には自ら用ひるやうになつた。主婦は茶碗に御飯を盛つて箸でそれを食べるやうになつたが、しかし箸は左の手で持つてゐた。



私は和服でパリのシャンゼリゼエとか、ベルリンのウンテル・デン・リンデンとか、ロンドンのピカデリーとかに立つて、何となく意氣の軒昂たるものがあるのを覺えたが、然し次の瞬間には、それら各都會の人の各々自己の生活にいそしんでゐる行人旁午の有様に興味を覺えた。

## 英 國

パリでは無造作にトロカデロの宮殿をぶち毀したり、市街電車をなくして往來には乗合自動車のみが驅つてゐたりする間に、英國では隣の大藏大臣の官邸が素晴らしく大きな立派な建物であるに拘らず、總理大臣の官邸は昔のまゝの小さな汚い官邸であつたり、往來には電車が通り、バスが通り、また舊態依然たる荷馬車がそれ等自動車、電車に挟つて通つてゐる。

ロンドンの街は狭くつて、そこに建つてゐる家屋が燻ぶつてゐて、ちよつと足を市街に踏入れた者は、これが音に聞くロンドンであるのかと不思議なやうな感じがするのであるが、その燻ぶ

つたやうな家の内部には各々巨萬の富を藏し、世の中の移り變りは一向無頓著のやうな中に、大きな根強い力が潜在して居る。

フランスの田舎を見ると、二頭三頭の馬を馱して畑を耕して居る平和な百姓の姿を見るが、それ等の百姓は毎日新聞に出る獨佛關係の切迫した記事を読んで顔を曇らし、こんな不愉快な新聞は目にしたくないと云つて地上に抛つとか聞いた。同じくドイツの百姓も二頭三頭の馬を馱して長い畑の畝を耕耘して居るが、彼等はどんな心持を持つてその日／＼の新聞を讀みつゝあるか。翻つてロンドンの田舎に這入ると、其處に耕すべき畑といふものは殆どなく、一面に青芝で蔽はれてゐる牧場があつて、そこには牛の群があり羊の群があり、百姓の姿は殆ど見受けられない。それ等の百姓は皆煙突の澤山出てゐる家に住んでゐて、其處は屋根裏とともに三階になつてゐて其處の村には古い時代からのチャーチがあつて、それ等の百姓は牛の乳を搾つたり、羊の毛を刈つたりして植民地の土人から得る物資の供給を受け、買物に行くとか、客の送り迎へをするとかいふには粗末ながらも自動車があり、有名なる作者の書いた脚本を寄つてたかつて研究し、一人の指導者の下に村芝居を興行するくらゐの暇を持つのである。

上海は各國の勢力がおよんでゐるが、しかし英國の勢力が最も多きにゐる。船が先づそこへ著



いて、次に香港、次に新嘉坡、次に彼南、次にコロンボ、次にアデンと著く港々は悉く英國の領地であつて、その勢力の世界におよんでゐるのに驚かるゝのであるが、偕てロンドンに行つて見ると各植民地の産業館が軒を並べて建つてをり、ブリチツシ・ミュージアムをのぞいて見ると、各植民地の風俗並に、それ等の地の新古の工藝品、それ等の蒐集がその宏大なる建物の中に整然として陳列されてゐる。

ロンドンの街頭には赤い二階づくりの電車、赤い二階づくりの自動車、それ等は少し地震でもゆれば直ぐ横にぶつ倒れさうな重い頭をしてよち／＼と走つてゐるが、その間を澤山の自動車が縫うて行き、また脚の先の毛深い、背のわりに高くない馬を二三頭つけた馬車がその間にはさまざまつて街頭にぎつしり詰つてをる。各運轉手も馬方も暢氣な迫らぬ顔をして悠々と前の車の動くのを待つてゐる。それ等のうちに大英國の挺子でも動かぬ姿を見る。

### 花鳥諷詠を説く

ひとりロンドンが徒に流行を追はず鈍重と思はれるまでに舊態を守つてゐるばかりでなく、流行の魁であると稱せらるゝパリですらもが、一旦街頭に立つて絡繹たる行人の姿を見ると、十八世紀ぐらゐな服装をして平氣で大道を歩いてゐる紳士もあり、淑女もある。ベルリンに至つてはナチスの影響か、往來を歩いてゐる婦人の面上に脂粉のあとを認めることが出来ず、斷髮女などは影を斷つてしまつて、少女は髪を長く後ろに垂らして歩いてゐる。

船が港灣に入るに従つて支那人、馬來人、印度人、アラビア人、それ／＼の生活の状態を見ることが出来たが、いづれも英國の勢力範圍若しくはその統治下にあつて、なほかつ各民族の生活を營んで居るといふ事は力強い感じを私に與へた。香港でも新嘉坡でも彼南でも支那の人間は澎湃と押寄せて來てゐて、商店といふ商店は殆ど彼等の經營する處であるやうに見えた。彼南で私



達を案内した朝日館の主人は、廿萬の人口が有るうち十六萬が支那人で、日本人は僅二百十五人に過ぎないと長嘆息し、福建人の墓場の廣大なを指さして、福建人だけの墓場でもこれだけ澤山の墓がある、これだけの大きな犠牲を拂つてゐるからこそ、今日の支那人の勢力を作り得たのである、なほ漢東人の墓場はまた別にある、其處もこの墓場に劣らぬ廣大なものである、と墓場の廣大なことを羨ましうにいつたこともまた領かれた。かれ等を統治する者が英國人であらうが誰であらうが、それらに頓著することなく、民族の肉をもつて堅牢なる地盤を築きつゝあるのは心強いことである。

馬來人でもさうである。かれ等は商賣を營む能力は無く、それは殆ど支那人の壟斷に任せてをるが、車夫なり土工なり、勞力をもつて口すぎが出来るところでは彼等も相當に發展し、スマトラ、瓜哇、ボルネオ、馬來半島に擴がつて、それ等民族の勢力の可ならずしも侮るべからざることを示してをる。尨大なる印度大陸に蟠居してゐる印度人も、今は數千年前の榮華の夢の跡を辿つてゐるばかりでなく、障らば動かんとする鬱然たる存在である。亞刺比亞人もその通りで、アラビア、エジプト、チュニス、モロッコ等、廣大なる天地に蟠居してをつて、エジプトなどはすでに獨立しようとする機運がある。

私はそんなことをいふのが目的ではなかつた。たゞ各民族がそれづくに發展し、それづくに蟠居して世界の國を形作つてゐるところに面白味がある。外國の文化に追隨せんとしてもがくのもよいが、また、自己民族の文化を提げて立つのもよい。

花鳥諷詠の詩たる俳句を彼等に説くといふことは初めから必ずしも豫期したことはなかつたが、しかし私の足の赴くところ説かねばならぬ成行になつて來たといふことも意味の無いことはなかつた。花鳥諷詠の詩の本當の姿を味はひ度いと思へば、その聖地エルザレムの日本に來いと私はいつた。

船は領土の延長であつて、マルセーユに著きロンドンに著くのは其處まで日本の領土が延長することになるのであつて、日本の本土と音信するのにも日本の料金で自由に無線電信をもつて通信することが出来るのである。花鳥諷詠の詩をかれ等に説くことは、花鳥諷詠國の領土の延長といふことが出来る。

かれ等民族の自然に恵まれぬ生活を憐むの餘り、私はもとめらるゝまゝ花鳥諷詠の詩を説いた。かれ等がそれに耳を傾けたか傾けなしかは私の知らないところであるが、假りにもその言説に何等かの力が有るならば、何處かにその種子は一握の土を得、空氣を得、日光を得て芽生える



時が来ないとは限るまい。花鳥諷詠の國土の延長は今後數年若くは數十年を俟つことゝしよう。

(東京日日・大阪毎日)

## 海外に於ける俳句熱

上

「海外に於ける俳句熱」といふこの標題に答へるには、今數ヶ年若くは數十ヶ年の後を俟たねばならぬかも知れぬ。何となれば、私が今度巴里、伯林、倫敦等を廻つて来て、初めて俳句の種子

を蒔いて来た許りであるから。

その種子が土壤を得、日光を得てよく生えるかどうかさへもまだ疑問なのである。今、私に海外における俳句熱といふ題を課せられてもちよつと當惑するばかりである。

併しながら、かういふ事は事實である。私が巴里に行けば、私を歓迎してくれて日本人會に集つた人々が私の一夕の講演ですぐ俳句を作つて見ようといふ氣になつて、二三十人の人々が兎に角俳句らしいものを作つたといふこと。又、伯林で私が講演をした翌日、俳句會を催して其處でも二三十人の人が兎に角季題を結んだ十七字詩を作つたといふこと。倫敦でも私の講演會の翌々日かにキュー・ガーデンといふ公園に吟行會を催して、其處で得た句を日本人會に集つて披講した。其他少人數の會合は、巴里、倫敦で各々兩三回、又白耳義のアントワープでも一回催されたこと。さうして其等の會合は今後寄り寄り催さるべき形勢であつたこと。

果して巴里俳句會、伯林俳句會、倫敦俳句會等の報道が今後月々内地に来るやうになれば、初めて此標題にふさはしい記事が書けることと思ふ。

海外に在留して居る人々が故國を懷み、故國の風光にあこがれ、その春夏秋冬四季の變遷の複雑美妙なることに憧憬し、一夜にして俳人となり、又、俳人となり得る資格を持つて居るといふ



ことは、私の親しく彼の地に臨んで経験し得た處である。

誰も故國の文藝である俳句を作つて見たいといふ欲望は有るのである。唯、中心となつて是を指導する人が無いばかりである。指導の立場に立たなくつても俳句を作るべく面倒を見る、といふ中心人物が一人有りさへすれば。

佛蘭西、獨逸、英吉利等の天地、山川、並に四季の變化は、日本ほど景趣に富みはしないけれど、然しながら佛蘭西に嘗て無いと聞いて居つた菜の花が有り、杏に似た花が有り、梅に似た花が有り、山櫻に似た花が有り、獨逸、英吉利等に雛菊が咲き、蒲公英が咲き、殊に英吉利の蒲公英は色が濃く花瓣が大きく、到る所に澤山ある。其等の國の天地山川、春夏秋冬は胸を擡げて俳人の來たるのを待つて居るやうな心持するるのである。

俳句は日本の天地山川、春夏秋冬が生み且つ哺んだ我が國特殊の文藝である。然も其特殊の文藝を彼の地に移植することも亦可能である。

いふのを忘れて居たが、北南米には既に大分前から俳諧國の植民が實行され來つてゐる。海外における俳句熱、といふ標題は寧ろ南北米に向けられるべきものであつたかも知れない。併し、其事は又別に言ふ機會があらうと思ふ。茲には最近旅行して來た歐羅巴にのみ就て言ふ。

## 下

序に外國人の間に於ける俳句の研究熱、といふやうなものは。

ドイツでの私の俳句の講演は主として聽衆の半ばを占めたドイツ人に向つてなされたものであつたが、それ等のドイツ人は日本の文學を研究して居るドイツの文學者や、若くは日本語を研究してゐるベルリン大學の生徒達であつた。ロンドンにおけるペンクラブでは、七十人許りの會合であつて、どんな種類の文學者が來て居たのか、それ等の點には不案内な私であつたが、兎に角チエアーマンを勤めたバイング氏は品格の有る老紳士であつて、東洋文學の造詣はかなり深いやうで、「孔子」「清少納言」等の著書があり、又俳句に就いても聊かながら知る所が有つた。私はそのバイング氏に勧められる儘に、そこでも俳句の講演をした。七十人の人は皆この東洋の一老人の口から何事がいはれるかといふことを好奇の眼を睜つて聞いてゐたが、果して私のいふ所の俳句のアウトラインを了解したか否か。

フランスには二十年前から日本の俳句に習つて「ハイカイ」と稱へる十七シラブルの詩が興つて



居る。これはクーシューといふ醫者が日本に風土病の研究に来て、日本に俳諧といふ詩が有るといふことを齎し歸つたのが初めてである。今度其クーシューといふ人にも會ひ、又、ヴォーカンス、スーザ等といふ老作家にも會つたが、クーシュー氏は十七字といふ事を傳へて、季題といふ事を傳へなかつた。私は季題のことをそれ等の人に説いたが、今後果してどういふ風に變化して行くか。

フランス、イギリス、ドイツの田舎に住んで居る人々であつても、煉瓦の壁によつて固く外界との交渉を遮断され、たま／＼窓を開けて外面を眺めたり、ドアを排して家の前に有る花園に出ることはあるにしても、彼等と自然界との交渉は稀薄である。殊にロンドン、ベルリン、パリ等に住つて居る都人士は、僅に街路樹に四季の變遷を知るくらゐである。クーシュー氏が俳句の十七字のみを傳へて季題を傳へなかつたといふのにも相當の理由は有る。

併しながら一方からいへば、それ等の人々は既に數百年來自然と隔絶すべく生活に馴らされ來たつたものである。私達、自然の間に哺まれ、自然と共に生長して來た者の目から見ると、其生活は不具であり、不自然である。先づそれ等詩人に四季の變遷を教へ、聽て彼等國民の上にも及ぼすことは俳句の徳ともいふべきものか。

以上も亦アメリカを逸しての話である。純アメリカ人で日本の俳句を作る人がボストンに一人有り、又コロンビア大學の先生をして居る人に最近「バンブー・ブルーム」といふ俳書を出した人が有る。それ等の事に就ても尙いふべき事が有るが、茲には矢張りこの間旅行をして來たヨロツバに就いてのみ言ふ。(東京朝日)



# 俳 話

## 何故日本人は俳句を作るか

——ベルリン日本學會に於ける講演——

私は全く目的のない観光客でありまして、又このベルリンには三四日ほか滞在致しませぬが、この講演の機会をお與へ下さつたことを會主に謝しあはせて諸君に感謝致します。さうしてこの席上にはドイツの方と日本の方がいらつしやいますが、私は主としてドイツの方にお話する



積りでこの講演を致します。あしからず御了承を願ひます。

私は日本の文學についても極く範圍の狭い俳句といふものほかお話しする資格を持ちません。その俳句の中でも歴史に關することはその道の人がありますから、その人に譲ります。ただ私は俳句の作者であります。従つて俳句についてのお話も極く限られた範圍のものとなります。

日本には俳句といふ短い詩があります。わづかに十七字であります。私はよくたはむれに日本人の百分の一か千分の一はこの俳句を作る人々であると申します。それほどこの俳句は日本に普及して居ります。何故にその様な短い詩が流行するかと申しますと、日本人は複雑な意味をも簡単な言葉で現すのを好みます。複雑な喜怒哀樂の情を現すにも沈黙微笑をもつてすることを好みます。殊に詩に至つては一本の草花一羽の小鳥によつて彼等の情を現すことを好みます。さういふ様な點から日本人は特にこの俳句といふ短い詩を愛するのであらうと思ひます。又さういふ様な點からいへば、禪道とか茶道とかいふものが日本人の間に流行するのも同じ理由にもとづくものであらうと思ひます。

もう一つ言つて置かなければならぬことは、五字七字といふものは日本語として詩の基調をなすものであります。日本の詩は韻を踏まぬかはり調子を貴びまして、この五字と七字が最も調子のいい言葉として、日本の詩は大概五字と七字の連続からなつてゐます。それで長い詩になりますと、謠とか淨瑠璃とかいふものがありまして、これは數百から數萬にわたる言葉の連続でありますけれど、大概五字七字からなつてをります。その中で五字七字が結びついて、最も簡單で、然も完全な意味を運ぶことが出来るといふのは、この十七字、即ち五字七字五字からなつてをる俳句であります。

然し形の上からこの俳句を説明するのは今日の講演の目的ではありません。この講演の目的はその短い詩はどういふことを詠ふのか、日本人は何んの要求があつて俳句を作るのか、といふことを申し上げてみようと思ひます。

俳句では春夏秋冬の四季のうつり變りの現象に重きをおきます。この春夏秋冬の現象を詠つて



それによつて作者の情懷を述べるのが、俳句存在の最大理由であります。否俳句存在理由のすべてであると言つていいのであります。

春夏秋冬の四季のうつり變りと申しますと、私は三四日前ライン河に沿うて汽車でケルンからハイデルベルヒにまゐりましたが、その時に見た景色で申しますと、櫻や梨や林檎の花が咲いてをりますとか、木々の若葉が花よりも美しく芽を出してをりますとか、小鳥が可愛い聲で囀つてをりますとか、雪解の黄色い水でライン河が氾濫状態でありますとか、山の間にはまだ雪が残つてをりますとか、又平地に出ますと菜の花が咲いてをりますとか、麥畑が青く連つてをりますとか、たんぼぼが咲いてをりますとか、さういふことが春の現象であります。俳句ではさういふことに重點をおいて、これを諷詠するのであります。

さうしてその櫻や梨や林檎の花が盛りだとか、木々が若芽を出してゐるとか、小鳥が囀つてゐるとか、雪解の水が青い草を浸して氾濫状態であるとか、菜の花が咲いてゐるとか、青麥畑があるとか、さういふ現象を詠ふ場合に、それを人間の運命に譬へたり、又それによつて戀を詠つたり

又哲理をその中に見出したりすることは直接に致しませぬ。ただそれ等の現象は、それ等の現象として受け取つて、自然を禮讚し、それによつて作者の情懷を遣るのであります。

俳句が始つてから今日まで凡そ四百五十年たつてをりますが、この春夏秋冬の種々の現象を詠ふといふことは一貫した性質であります。ただ始めの二百年ぐらゐの間はその春夏秋冬の現象を詠ふのに、この人生を滑稽とみる態度で詠ふといふ傾きがありました。芭蕉といふ人が出てからこの人生を閑寂な淋しい心持で詠ふといふ傾きになつてまゐりました。さうして今日の我々の態度は滑稽とか閑寂とかいふ心持に拘泥せず、先刻申しましたとほり、ただあるがままの自然を詠つてそれを禮讚するといふ態度になりました。

何故そんなに春夏秋冬の現象を詠ふ詩が日本に行はれる様になつたかと申しますと、それは日本人の性癖に基くものとも言へますが、もう一つ遡つて言へば日本の氣候が日本人の性癖を養つてさうならしめたものだと考へます。何故なれば日本の春夏秋冬の現象は最も複雑であり顯著であります、人間の心を捕へる大きな力を持つてゐるからであります。



先づ春といふ時候は、先き程ライン河の岸の風景を述べたのは、此獨逸のことで、日本では、櫻の花が咲いたり梨の花が咲いたり林檎の花が咲いたり、木々の若芽が吹き出したり、小鳥が囀つたり、雪が解けたり、菜の花が咲いたりする他に、植物では五形花ひんびが咲き土筆がのび、梅が咲き紅梅が咲き黄梅が咲き、蕨が萌え、はこべらが咲き薺が咲き春蘭が咲き、杏、李、桃、海棠、ゆすら、木瓜、沈丁花、藤、つつじ、山吹等の花が咲き、海には鹿尾菜ひじき、海藻もろこ、海雲うづ等がとれ、畑には大根の花、豆の花、水菜、鶯菜等が出來、又動物には鶯、雉子、鶯、駒鳥、雲雀、燕、蛙、蝶、虻、蜂、蠶等が時を得顔に活躍し、その他天文、地理等も複雑美妙な種々な現象をおこします。これは春の人體に適した暖い時候であります、その時候が三ヶ月間続きます。

さうして日本人はその小鳥類が鳴くのを百千鳥ちちどりとか囀りとか呼んで特に賞翫してをります。又種を蒔くことを雞頭蒔く、夕顔蒔く、糸瓜蒔く、胡瓜蒔く、南瓜蒔く、茄子蒔く、午夢蒔く、麻蒔くといふふうに一々その蒔くものの名前を上げ興味を呼んでをります。そのみならず一旦暖くなつて來たのが又急に寒くなつて來る、丁度今頃のこの地に於ける様なことが日本では二月か

三月の始め頃にあることがありますが、その多少不愉快に感じられることをも、冴え返る、互て返る、春寒、餘寒といふ風に、いろいろの言葉を使つてそれを懐しんでをります。

又蝶の種類も非常に多いのでありまして、その色彩も華やかで變化に富んでをります。そこで蝶を胡蝶と呼び懐しみ、又白蝶とか黄蝶とか紋白蝶とか烏蝶とか、種々な名前をつけてこれを愛憐してをります。これは科學上の名前ではなく、詩の上の名前であります。又櫻の花もこちらに咲いてゐる花の様に色彩のうすいものではなくて、色彩も濃ゆく香ひもあり華やかで、一本の櫻が咲いてをりますと是非その下に立ちよつて、これを眺めねばならぬといふくらゐに人を刺戟することが大きいのであります。従つてその櫻も、櫻を愛憐するあまりに詩人がこれを懐しみ呼んだ言葉が澤山あります。例へば八重櫻、遅櫻、朝櫻、夕櫻、夜櫻、花の雲、花吹雪、落花、花冷、花便、花守等があります。さういふ風に日本人は春の現象の上に一々愛憐の情を持つてのぞみます。

それから快適な時候の春が三月續きますと次には最も暑い夏が三月續きます。それから又爽快



な秋の時候が三月續きます。それから又寒い冬の時候が三月續きます。それから又春になるといふ風に規則正しく一年間を四等分して、三月づつ續くのであります。それ等の現象を一々説明することは煩はしいことでもありますから省きますが、夏、秋、冬の現象も春の現象同様複雑美妙を極めたものであります。

これ等四季の複雑美妙な現象は日本人の最も關心するところでありまして、その現象を讚美し愛惜してめいめいの心に抱いてゐる情懷を土臺にしてその四季の現象を諷詠するのが俳句であります。この四季の現象を讚美し愛惜するといふ心持は日本人共通の性質でありまして、日本人の心持をさういふ風に養ひ來つたのは日本の風土氣候が原因であらうと思ひます。

かねがね日本にゐる時分から、俳句はさういふ詩であるといふ見解を持つてゐたのでありますが、今度日本を離れてほんの世界の一部分ではありますが、旅行をしてきてみますと、この考へは一層確實になりました。フランスにしましても、このドイツにしましても、春夏秋冬、四季の變化は顯著ではない様であります。日本はこれ等の地よりも遙に變化が華やかで、複雑著明であります。その華やかで複雑で著明であるといふことが、専門的に春夏秋冬の現象を詠ふ詩を日本に發達せしめた所以と考へます。

日本は島國でありまして、山があり、谷があり、澤山の瀧があり、澤山の急流があり、沼があり、池があり、港灣曲浦があり、白砂青松があり、これ等景色の上の變化がいろいろあります。その上に更に春夏秋冬の變化が著明であるといふことが愈々景色を複雑化して自然を讚美する俳句を生んだものと考へられます。

フランスやこのドイツに滞在してゐる日本人諸君の中に、フランスやドイツでは四季の變化が嚴密でないから俳句は作れないと言ふ人がありますが、然し實際私が來てみたところに由りますと、四季の變化が日本程著明でないことは事實であります。然し俳句が全く作れないといふ程ではないと考へます。其現象は乏しいけれど尚俳句を作るに足るいろいろの材料があるといふことは今度實際來てみたことに由つて明瞭になりました。が、どこまでも俳句は日本の國土が生んだ文藝でありまして、俳句を作るには日本を宗としなければならぬと考へます。日本は俳句の聖地エルサレムであります。若しこのドイツの方が俳句といふものをほんたうに研究してみたいと



お考へになるならば、その聖地エルサレムの日本にお出でになりました、親しく日本の風土に接し、春夏秋冬の四季の現象を精しく観察し翫味されて、傍ら日本人の生活状態に親しんでみられる必要があらうと考へられます。

若しさういふ篤志な人がありますれば、西洋の方々が今まで夢想もしなかつた新しい天地がそれによつて開けてきて、西洋の詩壇に新しい影響を及ぼす事が無いとは斷言出来ないと思へます。近頃の日本の文藝は西洋の文藝の影響を受けて新しき發展をとげつつあります。それも私は結構なことと思ひますが、又日本の國土に芽ばえて、最も日本人的な文藝の俳句といふものが何等かの影響を諸君の文藝に與へる事も亦無意義な事ではなからうかと考へます。

俳句の面白味といふものは主として十七字の言葉の斡旋に由るものでありますが、然しその春夏秋冬の現象を如何に諷詠したかといふ輪廓だけは、辛うじて解釋し得るものであらうと思ひます。試みに古人の句一二句を解釋してみることに致しませう。

古 池 や 蛙 と び こ む 水 の 音 芭 蕉

この作者は二百年前に俳句を閑寂な趣味なものとした芭蕉の句であります。殊にこの句によつて始めて閑寂な趣味にめざめたといふ名高い句であります。この句は庭に年を経た池がありまして、自然手も入れないものであるものだから、其岸は木の根が露出してゐたり、杭が朽ちて土が水中に崩れ込んだりしてゐる、さういふ古い池があるのであります。ある日、極めて静かな午後、この作者は一人家にをりますと、どこかに、ドブン、ドブンと音がする、今までもしてをつたのでありませうが、その音が耳に這入る様になつて來ました。よく考へてみますと、これはあの庭にある池に蛙のとびこむ音であつたといふのであります。蛙は春になつて生れてくるものであります、これは春の現象の一つを詠つたものであります。物音の少い、佗人の住居に蛙の水にとびこむ音のみが響いてくるといふ春の日の静かな光景を描いたものであります。もつともこれも日本の家屋をご存じないと充分に味ひがお解りにならないかもしれません、木で作つた狭い家で、ガラス戸の替りに障子といふ紙をはつた戸が立ててあつて、その庭に起る物音はたやすく聴きとれるのであります。その庭には庭木が澤山あつて、その向ふに古池がある、その家の障子の



中にこの作者は靜かにをる、その庭に當つて蛙の水にとびこむ音が響いて來た。それ等の景色は日本の家屋の構造をご存じないと、この句の趣味は充分にお解りにならないと考へるのであります。

五月雨や大河を前に家二軒 蕪村

この作者は芭蕉時代と今日の時代との中間にある輝いた時代の代表的な一人であります。この句の五月雨といふのは、日本の夏の現象として六月の頃は一月ばかり雨期がある、それをいふのであります。これは鬱陶しい感じのものでありますが、然し日本人はその鬱陶しい中にもやはり種々の美しさを發見しようと致しまして、昔からこの雨期を讚美した句は澤山にございます。この句もその一つであります。

五月雨やといふと、その雨期の雨の降りつづいてゐることを表したものでありまして、雨が毎日の様にちとちと降つてゐる、河の水嵩は増すばかりで、濁つた水が滔々と流れてゐる、その川岸にやはり前に申した様な木で作つた粗末な、然し人の住んでゐる家がただ二軒あるが、その

二軒は別に水が増してくるのにも驚き騒ぐ様子もなく靜まり返つてゐる、その川水は刻々に増してくる、その二軒の家は尙ひつそりとしてゐる。この作者はその河水の刻々に増してくる強大な自然の威力に驚歎してゐる。若しかするとその小家に住む人は愈水の増大してくるのに驚いて、遂にあわてふためいてそこを立退く様になるかもしれない。然しその小家に住む人はそんなことはない和多寡をくくつて靜まり返つてゐる。その自然と人間との力の兩方が相俟つてちつと持ちこたへてゐる潜勢力といつた様なものがこの句の中核をなしてゐます。これは五月雨といふ夏の現象を詠つた句であります。(ホトトギス)

### 倫敦 P・E・N・クラブにて (一九三六・五・五)

私は此倫敦にもほんの僅しか滞在しないのでありますが、圖らずも此 P・E・N・クラブの御招待に預りまして誠に光榮に存する次第であります。



就きましては、爰に御挨拶に代へまして、思ひ出づるがまゝに俳句の輪廓を極く簡単に御紹介申上げて見たいと存じます。

日本の近代文學には、歐羅巴の影響を受けて色々新しい道を開拓しつゝある者もありますが、それと相竝んで、日本在來の文學を繼承し、其進歩を計つてゐる者もあります。

私は其後者の一人でありまして、俳句といふものを研究してゐる者であります。

日本には色々の詩がありますが、和歌と俳句は其最も代表的なものであります。和歌は三十一音より成る詩でありまして、五七五、七七の二行から成つて居りまして、約一千八百年の歴史をもつてをります。私の申述べんとする俳句は、今から約四百五十年前、この和歌の第一行から分離獨立したものであります。

俳句は五音、七音、五音の三節より成る十七音の詩であります。この五音と七音とは日本の總ての詩の基調を成すものでありまして、この五音、七音が結びついて最も簡單なる一獨立詩を成したものが俳句であります。

俳句は時候の變化の上に最も重きを置きます。さうして其時候の變化を通して、自然及び人生を諷詠します。

日本人は、四季の變化の現象を特に愛好する傾向があるやうであります。それは日本人本來の性癖に依るものでもありませんが、又、日本の變化極まりなき風光、始終明い光を投げかけてゐる太陽、整然たる四季の變遷などに影響さるゝ所が少くないと思ひます。日本の春は倫敦地方よりはもつと暖く、夏はもつと暑く、秋は極めて爽かであり、冬は相當寒くなります。従つて四季の變遷による季物の現象は可なり豊富であり、華やかであり、複雑であります。斯ういふ雰圍氣に生活して來た日本人は、古代エヂプトの民族が星に對して無關心で居られなかつたやうに、四季の現象に無關心で居られなくなり、其現象を讚美し、一木一草の上に現れたる四季の變化にも自然の神祕、造化の妙、ともいふものを認めまして、人間の運命、權力の争ひ、男女間の戀に於ける場合と同様な強い熱情を花鳥禽獸の上にも見出し、季物の變遷に對して特に詩的感興を持つやうになつたものかと思はれます。



俳句では、この春夏秋冬によつて生滅變化するものを「季題」又は單に「季」と呼びまして、この十七音より成る一つの句の中には必ずこの季を詠み込む事になつて居ります。それは「季」がこの小さな詩の中に在つて其時候を聯想せしめ、驚くべき自然の背景を現前せしめるからであります。俳句に「季」の必要な所以は實に此處に存するのであります。

私は日本に居りまして、歐米の氣候は日本ほど變化が著しくなく、従つて俳句は成育し難いかと考へて居りました。此度親しく歐洲に旅を致しまして、日本ほどには適してゐないかと感じた所もありますが、俳句の成育に全然不適當だとは思はないのであります。

例へば、英國では霧が霽れる頃にはスノードロップが咲き、次いでクロッカス、アネモネ、水仙が開き、櫻草、チューリップが現れ、ホーソン、ライラックが薫るといふ風に、可なりの變化はあるやうでありますし、俳句の如き詩も亦成長し得る可能性はあるものと思ひます。

日本では俳句を「十七音詩」とも呼んでゐます。十七音といふのは、日本語として、四季の現

象を詠するに最も適した形であります。其他の國語で作る場合は必ずしも十七音を必要としません。私は巴里に於て、佛蘭西語によつて十七シラブルの詩を作り、それを「ハイカイ」と呼んでゐる人があるといふ事を聞いて居りますが、それに固執する必要はなからうと考へます。重ねていひますが、十七音と云ふのは日本の國語が要求する形なのであります。各々其國語の要求する形によつて、適當な詩形を選ぶべきだと考へます。

俳句は、氣候の變化に伴ふ天然及び人事を諷詠するものでありまして、それは世界の中で最も短い詩でありまして、また眞に詩中の寶玉にも比すべきものかと思ひます。(ホトトギス)



# “ON HAIKU”

By Takahama Kyoshi

As the Guest of Honour at the P. E. N. Club, London.  
On the 5th May, 1936.

Translated by Matsumoto Kakujin.

490

I deem it a great honour to be here by the invitation of the P. E. N. Club during my brief sojourn in England, and it is my pleasure to introduce to you the outline of “Haiku,” giving a short explanation thereof.

Modern Japanese literary circles might be classified into two groups, one, influenced by Western ideas, is opening up new roads, the other is striving to develop the pure Japanese literature hitherto cultivated. I adhere to the latter group, and I am a devotee of Haiku.

In Japan there are several forms of poetry, among which Waka and Haiku are considered the most characteristic. The Waka is about 1,800 years old and consists of two lines containing 31 syllables or sounds, and Haiku, of which I am speaking, originated in Waka but took an independent course about 450 years ago, a little after Chaucer and earlier than Shakespeare.

Haiku consists of 17 sounds in 3 consecutive sections of 5-7-5. Indeed, the 5 and 7 syllabic arrangement is the basis of Japanese songs and poetry, and Haiku is the shortest and simplest form.

Haiku has always special reference to the seasons, and expresses poetical emotion upon Nature and human life through the change of the seasons.

The Japanese people seem to be particularly attracted by the working of Nature in the change of seasons. This may be an innate characteristic of the race, but is probably due to the influence of varied scenery, constant sun, and regular change of the seasons. Our Spring is warmer than yours, our Summer hotter, our Autumn clearer and cooler, and our Winter colder, and the working of Nature seems to be more abundant, more striking, and more complicated than in other countries. Living in such an environment, the Japanese probably have been unable to remain indifferent to all those phenomena, any more than were the ancient Egyptians to the stars.

491



Appreciating the delicacy of those phenomena, and acknowledging the mystery of creation, the wonder of Nature, even in the flickering change on a single tree or on a single blade of grass, they seem to have found the same ardent fervour in flowers, birds, and beasts, as in their love, their fates, their strife for power, and have thus discovered poetical emotion in the working of Nature under the change of seasons.

In Haiku, the things that grow, change and die, as the season passes, are called "Seasonal Subjects" or simply "Season", and the "Season" is indispensable to this 17 sound poetry. The reason is that the "Seasonal Subject" in this diminutive poem enables us to associate it with the time of year and will help us to visualise wonderful Nature as its background.

While I was in Japan, I thought seasonal changes were not so prominent in Europe and America, and therefore, the climatic conditions might not be so suitable as in Japan for "Haiku" to grow and develop. In fact, having now travelled through the Continent, I have the impression that it will not be so suitable as in Japan, but at the same time, I do not think it altogether impossible.

For instance, in England, as the last Winter fog clears away, snowdrops appear, the crocus, anemones, and daffodils bloom, followed by primroses and tulips, then

hawthorn and lilac will scent the air. Thus England is not lacking in these seasonal changes, and I think it possible that a poetry such as Haiku could develop here.

In Japan, Haiku is sometimes called "17 sound poem", and the 17 sounds constitute the most suitable form of poetry in the Japanese language, depicting, as it does, the phenomena of the seasons. I hear that in Paris there is an attempt to found a school of poetry called "Haikai" consisting of 17 syllables. However, I hold that there is no sense in adhering to the form of either 17 sounds or 17 syllables in any other language but Japanese.

The poet who wishes to write a poem such as "Haiku" would be well advised to adopt a short poetical form best adapted to his own particular mother tongue.

Let me close this short address by repeating that Haiku is the shortest form of poetry in the world, dealing with the work of Nature and human life in the change of seasons, and it may be truly called the "Gem of Poetry".

席上にてはメーヤー夫人の譯を用いました。尤もメーヤー夫人の譯も其實松本覺人君の力を要することが多かつたのでございます。其後覺人君から完譯として此に掲げたものを送つて來ました。(ホトトギス)



## 留別俳話

(昭和十一年二月十三日、東京中央放送局にて)

私はまだ今日迄西洋には参つたことがありません。國外に足をふみ出したこと、いつては只今の滿洲國になる前に二度ばかりその土地を踏んだことがあるのに過ぎません。が、平常から私は斯ういふことを信じてよく口にしてゐるのでございます。それは俳句は日本の國土が生んだ文藝である。我國は春夏秋冬四時の循環が最も正しく行はれる國であるところから、その四時の景色の變化を諷詠する特殊の文學の俳句といふものが生れて來たのである。これは西洋などでは發生しようにも發生することの出來なかつた文學でありまして、我國のやうな四時の風物に富んだ國

でなければ起り得なかつた文藝である。殊に其我國は島國でありまして、地理的に申しましたも山があり、谿があり、浦があり、灣があり、白砂青松があり、湖、沼、河、瀑があり、高原があり平地があり、種々の變化に富んでをります。その地理的の變化に富んでをる上に春夏秋冬の變化が正しく行はれて、春は春雨が油のやうに降り、夏は夕立が篠をつくやうに降り、秋は秋雨が蕭條と淋しく降り、冬になるとからびた時雨が降り、雪や霰が降る。又、朧々たる春の月が空にかゝり、清く澄んでをる秋の月が山の端を出る。春は百千鳥が木の間に囀り、夏は蟬の聲が耳を聳し、秋は澤山の色鳥、即ち鶉とか百舌鳥とか、鶉とか、鶉とかいふ小鳥類が渡つて來、冬は水鳥が堀や沼にうくといふやうな鹽梅で、それに春は櫻が咲き、菜の花が咲き、夏は木の葉が生ひ茂り、秋は千草が咲き亂れ、冬は木の葉が悉く黄落する。それらの現象は複雑微妙を極め、殆ど送迎に違がないといふ位であります。そこで昔は萬葉の歌よみにも山邊赤人といふ、景色を詠するのに堪能な歌よみが既にあつた位であります。それが段々後の世になつて來ると、俳句といふものが出來まして、それが専門に春夏秋冬四時の風物を詠する役目を司るやうになりました。斯ういふ風に専門的に四時の風物を詠するといふ詩は西洋には恐くないのでありまして、俳句といふものが我國に存在してをるといふことは、我國の風景が變化に富み、我國の春夏秋冬の變化



が正しく行はれ、それらの現象が複雑微妙であるといふことを證據立てるものでありまして、それは我國の誇りとしなければならぬものであると考へてゐるのであります。まだ西洋の土地を踏まない者が斯ういふ事を言ふのは少しをかしいのでありますが、しかし私はかね／＼人の話を聞いたたり、書物を讀んだりして、さういつても大體間違がないことであらうと考へてゐるのであります。外國でありまして、氣候の快適な國々は澤山あるやうであります。ハワイなどは一年を通じて最も快適な時候であるやうに聞いてをります。又アメリカの西海岸にもさういふ樂天地はあるやうに聞いてをります。其他澤山あるのでありませう。が、春は心持よく暖くなり、夏は酷暑になり、秋は晴朗な天地になり、冬は酷寒になり、一年を四等分してその一は春、その二は夏、その三は秋、その四は冬といふ風に四時の變化が正しく行はれるといふ國はあまり世界中に澤山はなからうと考へます。

我國は天から恵れたさういふ四時の變化をうけ持つてゐるのでありまして、その我國の天與の恵を謳歌するものが俳句であらうと考へるのであります。滿洲あたりを經巡つて來ると、殊にその感が深いのであります。

此度は不用意な旅でありまして、何の計畫もないのでありますが、たゞ其中に自然歐洲の景色風物に接することが出來て、かね／＼私の考へてをる、俳句は日本の島國が生んだ誇るべき存在であるといふことが事實に於て證明され、ば結構だと思ひます。又そんなものでなく、風景時候の變化も日本以上のものが歐洲に存在してゐることが判れば、それも大變な學問だと思ひます。又いさぎよく今迄の所論を訂正します。が、それと同時に、又海外にある多くの俳人諸君が、どうも俳句が作りにくい、どういふ風にしたらば海外の句が作り得られるのであるか、例へば、シソガポールといふやうな熱帯の地にあつては、日本の春夏秋冬を土臺にした俳句の歳時記といふ書物は當にならん、それはどういふ風にとり扱つたらいいのか、又、ヨーロッパの大陸に遊ぶ者はヨーロッパ人の生活を觀るのはまことに興味があるが、ヨーロッパの風景時候には俳句になる材料は乏しいやうに感ずる、といふやうな話を聞く。それ等は、俳句は日本に生れた特別の文學であるといふ平素の私の考へを證明するものでありまして、一應は私もそれ等の人々の不平にむしる満足を表すものでありますが、しかし、日本の國土に生れた俳句なるものを、外國に移植するとして、それがどの點までは成功するものであるかといふことを見ることには又大いなる樂みがあるのであります。此度の外遊をいゝ機會にして、それらの地方にある俳人諸君と共に俳句



を語り、又諸國を旅行する時分に、多少の俳句を自ら作る機會を見出すことが出来るといふことは又幸なことゝしなければなるまいと思ふのであります。

私の旅行は前申したやうに全く漫遊であります。勢ひ俳句にも觸れることゝ思ひますから、外國旅行といふことが、俳句の上はどういふ結果をもたらしますか、その事は又歸つた上で申述べる機會があらうと思ひます。アメリカのポストンには、プロバン一羽といふアメリカ人の俳人があります。それはこの前、田中王城君がポストンに行つた時分に親しく面會したことがある人であります。自ら毛筆を以て日本の半紙に漢字や日本假名で十七字の俳句を認めて送つて來る人であります。

例へば次のやうなものがあります。

大雨のあとそこゝに蚯蚓出づ  
道のべに墓新しや秋の風  
雲の峰に遠かみなり稲光  
避暑の宿窓に必ず女あり  
擧げれば際限がありませんが、先づ斯ういつたやうなものであります。

その他アメリカの西海岸には澤山の俳人の結社もあり、澤山の俳人も居ります。若し歸り路を大西洋からアメリカを横斷して歸ることになりますれば、自然さういふ人達にも會ふことが出来るだらうと思つて楽しみにしてゐます。

序に佛蘭西には「ハイカイ」といふ名前で佛蘭西の詩を作る人々があることを聞いてをります。それは如何なるものであるかと申しますと、雑誌で散見したのであります。左の如きものださうであります。

日本に於けるやうな

澄んだ朝に、海が

私に詩を作らす。

三味線の音

門に音がする。おゝわたしの愛人？

いゝや、風、風！



これでは私達の考へてをる俳句とは全く性質の違つたものでありまして、愈々私の、俳句は日本の本土が生んだ詩であるといふ事を確めるやうになるのであります。これらの詩の如く「私に詩を作らす」とか或は又「おゝわたしの愛人」とかの如く抒情文句、悪くいへば理窟といひますか、さういふ理窟なり感情なりをむきだしに述べることは俳句としては最も嫌ひます。俳句は春夏秋冬四時の風物を敘するものであることは前言つた通りであります。作者の感情は内にこめて、それを容易に暴露することは致しません。これは東洋人的とでも申しませうか、西洋の詩人と東洋の詩人と異つてをる最も著しい特色の一つであらうと思ひます。所謂、柳は緑、花は紅式でありまして、たゞ客觀の事實を述べて、その事實を述べる言葉の斡旋によつてそれとなく作者の感情を敘してをる所が俳句の特色なのであります。例へば、

古 池 や 蛙 と び 込 む 水 の 音

といふ句の如きは句の表には作者の感じといふものは一言も述べてはないのであります。たゞ古池に蛙がとび込んで水の音がするといふだけのことが言つてあるに過ぎません。それでゐて、その内には静寂な境地に居るこの作者芭蕉の心持がにじみ出てゐるのであります。

荒 海 や 佐 渡 に 横 た ふ 天 の 川

の句の如きも同様であります。日本海の怒濤澎湃たる向ふに佐渡ヶ島が横はつてをる、大空には天の川がかゝつてをるといふ單純な敘景句であります。それでゐてこの中には旅人芭蕉のそれら壯大なる景色を嘆美する半面に、又淋しい情懷を寄せてをる其感情が隠れて居るのであります。又、

一 つ 脱 い で 後 ろ に 負 ひ ぬ 更 衣

といふ句の如きも、夏になつて暑くなり、更衣をしなければならぬのであるが、旅にある身であるから、著更へる衣もなく、たゞ著重ねてをつた一枚の衣を脱いでそれを後ろに負ふ、それが漂浪の旅にあるものゝ更衣といふべきである、といふことをいつたので、それにも旅人のわびしさといふものが詠つてあるのであります。何等それらの情は表面に敘してなく、只一枚著物を脱いで後ろに負ふといふ事柄のみが敘してある。俳句の中には抒情のものもありはします。しかし大體この客觀的敘述の呼吸を以て行かねばならぬものであります。それに「ハイカイ」と稱する佛蘭西の人々の作つてをる佛蘭西の詩を見ますと、全く種類の違つた彼の地の人の從來作つてをつた種類の詩になつてをる、唯文字の数が少ないといふ許りであります。俳句といふものはポストンのプロバン一羽といふ人のやつてゐる如く、日本人になりすました心持で、日本語の十



七字で四季を諷詠するといふ態度でかゝらねばならぬものであらうと思ひますが、それは先づ百歩を譲つて、佛蘭西語で俳句と稱へる詩を作るといふのであれば、柳は緑、花は紅式の諸法實相、即ち客觀の景色なり、事實なりをありのままに描き出すといふ詩作法を採用すべきであらうと思ひます。若し佛蘭西に行つてそれらの所謂「ハイカイ」を作ると稱へてをる佛蘭西の詩人に會ふ機會でもあつたらその事だけは話して見ようかと思つてゐます。

此頃は却つてこの東洋人の特色である黙して語らず、とでも申しませうか、客觀の事實だけを敍べて情は内にこめて置くといふ方法を嫌つて、饒舌に綿々と情を述べるといふ西洋人の詩作法を俳句にも移して、それで新しいとしてをる若い人々もあるやうであります、それは徒に西洋人の模倣でありまして、力の弱いものになつてしまひます。俳句はどこまでも東洋的な、客觀的な、言葉の少ない、拈華微笑的な性質のものであります。序にそのことを言ひ添へて置きます。

(ホトトギス)

## 歐洲俳句の旅

(昭和十一年六月二十二日、東京中央放送局にて)

歐羅巴から歸つて來る時分に、新嘉坡で郵船會社の支店長の森野氏に招かれて、晚餐の御馳走になつたのでありますが、其席上で、森野氏は、新嘉坡は所謂常夏の國であつて明けても暮れても暑い、一年の始から一年の終りまで暑い、かういふ氣候の變化の無いところに居る人間は勢ひ怠惰になつて了ふ、例へば手紙を三本書くと、もうそれでがっかりして了ふ、頭が自然空っぽになつてしまふ、其が、四季が完全に變化して、冬が過ぎ去ると春になり、春が過ぎ去ると夏になり、夏が過ぎ去ると秋になり、又、秋が過ぎ去ると冬になる、其變化が極めて明瞭であつて、併もその期間がいづれも三ヶ月づゝであつて、其變化が規則正しく行はれるといふ日本のやうな國であつてこそ、初めて人間が勤勉な人間になり、その國の文化が發達する、といふやうな話を話



したのであります。私はその話を聞いて居り乍ら、何だか、自分の平常いうて居ることを森野氏から説かれて居るやうで、をかしくもあり、又嬉しいやうな心持もしたのであります。森野氏のいうて居る處は主として文化といふ點に於て、日本の變化の多い四季を禮讚したのであります。私は俳句といふ立場から、其日本の正しい四季の循環が、四季諷詠の詩即ち俳句を生んだ所以である、といふ平常の持論を、氏の言説で裏付けられて居るやうな心持がして面白く感じたのであります。私は、春夏秋冬の循環が正しく行はれ、その現象が變化に富み、華やかで、美しい、といふ國は日本を措いては他に無い、といふことを、兼ねて持論として述べて居たのであります。併し今迄は、親しく西洋の各地を見ないので、それを論じて居たのでありますから、或は西洋の文明國にも同じやうな變化があるのかも知れない、さうであつたならば、此持論を訂正しなければならぬ、と考へて居たのであります。親しく英、獨、佛の土地を踏んで、親しく接した處から見ても、又其地に在留して居る人々から聞いた處に依つても、私の言つたことに誤りの無いことが證明せられたのであります。世界は廣いのでありますから、どこかを捜せば日本と同じやうな國が存在して居るかも知れません。併し少くとも文藝の盛んである國々、殊に泰西の諸國には、日本ほど時候の變化に恵れた國は無いといふ事が明かになりました。

先づ熱帯地方は單調に只暑い一方であることは申すまでもなく、フランス、ドイツ、イギリスの如きは、冬は長く、それに春、秋といふやうな時候は殆どないといつてもいゝ位であります。すぐ冬から夏になるといふ有様であります。尤も春とか秋とか稱へてゐる時候はあるのであります。其は日本の春、秋とは違ふ。日本で味ふ如き變化の妙は缺けてをる。春、秋があつたところで、其は極めて短い殆ど味つてをる遣が無いといふ有様であります。西班牙とか葡萄牙とかいふ處はアフリカから吹く風の影響を受け、亞熱帯ともいふべき國であります。伊太利も南海岸になると椰子其他熱帯の植物が繁茂してゐるのであります。アメリカは通りませんでしたから分りませんが、聞くところによりますと、其處も日本ほど變化が顯著でないといふことであります。それで時候の變遷、その各現象を詠ふ俳句は、わが日本に於て始めて發生し發達して來たといふ理由がいよゝ明白になりました。

巴里では、横光君と私との歡迎會が日本人會でありました。横光君が文藝談をし、私が俳句談をしたのであります。其あとで席上の人が、期せずして俳句を作つて見ることになつて、殆ど參集した全部の人が俳句を作つて、海外の一夜を作句に更かしたといふことも面白い現象でありました。



白耳義のアントワープでもそこにゐた領事が私達を招いたのでありますが、其あとで、やはり俳句を作ることになりました。日本人の数の少ないアントワープの主だつた人といへば、領事と領事館員位のもので他は少數なのでありますが、其領事や領事館員が皆遼の俳人になつたのも亦面白い現象であります。

それから獨逸の伯林でも、日本學會といふところで、俳句の講演をしたのでありますが、其翌日二三十人の人の俳句會が開かれたのであります。その前日の講演會の時は、獨逸人半分在留日本人半分の會でありましたが、其時私の講演がすんだ時に、日獨協會長のベーンケといふ人が、私に「貴君の講演が日本人の心を日本に蘇せたことを喜ぶ」といひましたが、正しくそんな趣がありました、直に翌日俳句會が催されたのであります。何れも異郷に在つて日本をなつかしむ情は濃厚なものがあります。殊に日本の山川氣候が日本人の心を捉へて離さないであります。俳句を作ることは即ち日本の天地山川、春夏秋冬の各現象を思ひ出すよすがとなるのであります。

以上巴里、ベルリン等は今迄その土地に俳句といふものは殆どなかつた、俳句のためには全く荒蕪の地であつた、全く處女地であつた。それらの處女地に、私が行つたために、一夜にして俳句會が起つたといふことは、いかに日本人の頭が花鳥諷詠の精神に満たされてをるか、一夜にし

て俳人となり得る資格をもつてをるかといふことを證明するものであらうと思ひます。私はかねがね、日本人の百分の一は皆俳人になり得るといふことを申してをりますが、其を實證したものであらうと思ひます。

それから英國の倫敦に渡りますと、こゝには前から俳句會が出来てをつて、既に三四回の會合が続けられて居つたのでありますが、こゝでも講演會が催され、又其翌日であつたかにキュー・ガーデンといふ大きな公園に吟行會が催された外、二三、個人の宅にも招かれて、そこでも小俳句會が催されたのであります。

是等は私が其地へ行つたといふことの爲に、ベーンケ提督の所謂「日本人の心を日本に蘇せた」ことになるのであらうと思ひます。

次に日本人側ばかりでなく、外國人の側にも、前申したやうに、私を擁して俳句の講演會を開かされる様になつたといふ、さういふ欲求が自然そこに起つて來るのも、畢竟今日大變な勢で興隆しつゝある日本の文明、日本の文化、其中でも主として古い日本の文化を研究しようとする彼等の熱意の現れであると思ひます。

伯林では、獨逸人で日本文學を研究して居る人、並に日本語の出来る人、殊に、伯林大學の生



徒達の中で日本語を研究してゐる人々、それらの人々に、在留日本人を加へて五六十人の集りて俳句の講演をしたのでありますが、私は主として獨逸人に話す積りでしたのであります。その講演は勿論日本語でありまして、それを仙石といふ、伯林大學にゐる人が逐次譯に獨逸語に譯してくれたのでありますが、俳句の話を獨逸語に翻譯するのは相當に困難を感じたやうでありました。しかし熱心なる獨逸人は、私の日本語の講演の方をも、聞洩らすまいとして耳を傾けて居つたやうでありますし、又熱心にノートにとつてをるのも見受けました。

倫敦のペンクラブ、このペンクラブは最近日本にも出來たのでありますが、ロンドンが一番はじめに出來た、今では四十餘個國に出來てゐるとかいふことですが、先づロンドンが宗家の形であります。其ペンクラブで招待をうけました時も、私はやはり俳句の講演を致しました。獨逸で致しました時分は通譯の時間を合せて一時間以上に互りましたが、倫敦のペンクラブの講演は通譯共に二十分位の簡單のものでありました。私は獨逸人なり英吉利人なりに俳句の何物たるかを知らせるべくつとめました。併しこの詩は日本の國土が生んだ詩である、日本の氣候が生んだ詩である、これを貴君方の國に移植しよう、貴君方の國語で新しい花鳥諷詠詩を作らうと思へば作れないこともない、どうかさういふ詩の發生せんことを望むものである、が、しかし日本の俳句

の眞髓を知らうと思へば、日本に來なさい、俳句の爲には其聖地エルサレムである日本に來て、日本語をも知り、親しく日本の氣候風土風俗人情に接する必要があると説いたのであります。あちらの人は研究心が旺盛でありますから、若しかすると俳句研究の爲に日本に來る人が無いとは限りません。實際西洋の時候の變遷にのみ接して居つたのでは、日本人の俳句といふものは本當に解せられないのであります。日本に來、日本の風俗に馴れ、日本の四季の變遷を親しく見た上でなければ本當に解し得られないのであります。それほど俳句は日本の國土と切つても切れない詩であります。

フランスにはハイカイと稱へる十七シラブルの詩を作つてゐる人の一團があります。これは今から二十年前にクーシューといふ醫者が日本に來まして、首の下がる病氣を研究しました。この首下り病といふのは日本と瑞西だけにある病氣といふことで、特にその首下り病を日本に研究に來たといふことでありますが、その人が歸る時分に俳諧といふものを持つて歸つて、日本にかういふ詩がある、俳諧というて僅に十七字の詩がある、といつて教へた處が、忽ちその十七シラブルの詩がフランスの詩壇に擴がつて、流行するやうになりました、その詩を作る人をハイカイ派の詩人と稱するやうになつたといふことであります。一時は隆盛を極めたさうであります、昨



今は稍衰へてをる、昔日ほどでは無いといふことであります。衰へてをるといつても猶其うちの十人餘りの人が私を迎へて集つた程でありますから、相當に盛なのであります。先の首下り病を研究して俳諧を初めてフランスに持つて歸つたといふクーシユーといふ人にも面會しました。そして世界大戰の時分に從軍をして戦争を題材としたハイカイの詩をつくつて有名になつたヴォーカンスといふ人にも出會ひました。又スーズといふ熱心なハイカイの作者にも出會ひました。これらの人は皆何れも相當な老人であります。私はそれらの人の作るハイカイに四季の現象を諷詠するといふ用意の缺けてゐることを指摘して、十七字といふのは日本の國語でこそ最も必要な詩型であるけれども貴君方の國語に移す時分には十七シラブルに限つたことはあるまい、貴君方の國語の要求する型を選ぶがよい。そんな形よりも寧ろ四季の現象を諷詠するのが第一要件であるといふことを説明しました。クーシユーといふ人は俳句の十七シラブルといふことを傳へて、その肝腎の四季の現象を諷詠するといふことを傳へるのを忘れたために、今日のフランスのハイカイの詩といふものは十七シラブルの詩といふばかりで、其内容は日本の俳句と稍遠いものとなつてをります。併しなかには俳句に近いものもあります。今後どういふ風になるか、其變化を樂しみ待つてをります。又十七シラブルといふことも、日本を宗として之を採用したといふことで

あるならば、必ずしも國語の性質を問ふ必要なく其志を嘉すべきだと思ひます。

日本の尤も天然に恵れてをる春夏秋冬の循環の正しい國といふことは、日本の内地にをるとそれが當り前のことのやうに思へて、此四季の現象を輕々しく見過ごす人が多いのでありますが、足一旦故國を離れて、すぐ近くの對岸の滿洲に行つただけでも、日本の有難さはしみ／＼分るのであります。私は以前滿洲に二度遊んだことがありまして、其事だけで大體想像がついて、俳句は日本の國土が生んだ詩である、日本の時候の變遷が生んだ詩であるといふことを口を酸くして申して居つたのでありますが、今度印度洋を通過し西洋に足を踏み入れて見て益其信念を強めたのであります。在留日本人が故國にあくがれてゐるのは、種々の理由もありますが、又日本の四季の現象にあくがれる情も強いのであります。(五 藻)



— 章 子 —

旅 だ よ り

(立子宛「玉藻」掲載其他)

—

色々有難うございました。昨日の夜、章子は少し氣持が悪くなつて困りましたが、お父さんはとても〜元気で、夜御飯を澤山食べられました。





今、名古屋に止つてゐて俳人方が大勢来てをられます。今十一時ですけど二時に出發して又動くの思ふと、どうもホームシックをおこしてこまります。

半年なんてすぐにたつてしまひますわね？（二月十七日箱根丸より）

二

皆さん元氣ですか？ お父さんもとて／＼元氣で世話をするつもりだつた章子がゲロ／＼やつてしまひました。反對です。

でも神戸を出發した後は瀬戸内海でまはりの景色もいゝし静かだつたので甲板に出たり雑詠を選び分けたりしてなかなか活躍しました。

それにひきかへてお父さんは雑詠で部屋にひきこもつたきりでお氣の毒で仕方ありませんでした。

では、名古屋、大阪、神戸であつたことを少しお話し致しませうか。

名古屋では唯、牡丹會の方達がランチで見え（船が港に入らなかつたもので）浅井さんの方達

と章子は澤山お話ししました。

大阪では上陸し、土の上を歩いてゐると、どうしてもフランスまで行くんだとは思へませんでした。唯、フランスへ行く想像を章子一人ではゐたのではないかなんて考へてしまひました。

上陸してまづすぐに大阪朝日をお尋ねして藤井へお晝御飯を食べに行き、大道さん、木國さん、旭川さん、お父さん、章子の五人でスキヤキを食べました。暫くぶりでおなか一杯に食べ急にホームシックをおこしてしまひました。

それから木國さんと一緒に大毎へ行き、箱根丸へ歸つて一時間後神戸へ著きました。

出迎への方達が多數来て下さつてゐましたけれど、挨拶だけして兄さん達と蘆屋の家に行き、それから買物をお父さんと兄さんと三人でして、お茶を飲みながら鎌倉へ電話をかけて、母さんと話をしました。とても懐しくて、又ホームシックをおこしました。どうも困ります。

十時過に船に歸りました。

次の朝（十九日）お父さんと藤田さんのお家へお尋ねして小母様にお目にかゝり、御主人のお話をして泣いてをられたのは本當にかなしくてお氣の毒で章子も胸がいつぱいになりました。それから大毎で横光利一さんと一緒につるやで御馳走して下さいました。



それから神戸同人會の俳句會で吟松亭といふ所で御飯を食べました。

さうく藤田さんの歸りに泊月さんの所でお父さんが揮毫され、大道さんがをられて、お父さんの字を見て「大分違つた。前に書いたのはお酒で書いたんだな」つて大笑ひしました。

吟松亭では佐藤肋骨さん、佐藤紅緑さんも見えてとてもお父さんもうれしさうでしたわ。

又、夜、船に歸りました。

その日、晴子姉さんの赤ちゃん生れたつてきいて本當にくうれしかつたです。早く見たいけれど、もう章子が見る時は人間らしくなつてゐるわね。名前は今日、お父さんがお出しになりました。

神戸で出帆の時は横濱みたいに乗客が少くないので大混雑でろくに挨拶も出来ず、皆さんに失禮してしまひました。星野さんのマ、とケンちゃんが来て下さつて本當に恐縮してをります。立子姉さんからもお禮申上げて下さいね。

すゑ子さんが来て下さつて、日本人形とお藥を下さつたの。そしていきなりバーンとぶたれました。マルセーユまでいたさが續くやうにつて。

そして、三時、たうとう皆さんとお別れして出帆しました。

瀬戸内海は夜になつてしまひましたが四國の電氣が美しく見えて、なんだか懐しくて、お祖父さん、お祖母さんのお墓があると思つて、無事お父さんと章子の航海が出来ますやうにと拜みました。お父さんもなつかしかつたのでせう、寒い甲板にちつと立つて見てゐられました。今お晝御飯の鐘が鳴りましたから、又あとで……(二月二十一日)

三

今國際電話で短い時間でしたが面白さうでしたね。

前に書いてあるお父さんの手紙を一寸讀んでみて思はず肩をすくめてしまひました。

章子も自分ながらあまり勇氣がありすぎるので驚きました。支那服ばかりの中に章子一人セーラーを着て少さいくせに踊つたんですもの。お父さんのお驚きになるのも無理ありません。そして夜おそくなつてしまひました。でも、もうけつしてやむをえない外はこんなことしないつもりですからご安心下さい。

上海に来てあたりの景色を見てみると、どうしても夢の様に思へて仕方ありません。そして活



動か何かを見てゐるやうで……

まさか自分がこんな突然上海なんかに来るとは思つてゐなかつたんですもの。

でも月廻家におちついてゐるときだけまだ日本に居る氣がしておちついてゐられます。

今日上海はみぞれが降つて大變寒いです。

東京も又大雪だつたさうですね。新聞を見ておどろきました。

母さんが風邪をひいていらしたとか、又雪など降つていかゞでせうか。心配です。

一つ面白いニュースがあります。

お父さんが支那の變テコな眞黒な帽子を買つてかぶつてをられます。

だん／＼色んな風にかぶれて來ますから、洋服もあやしいものです。

これから月廻家でお晝御飯を食べて出帆までおちついてゐます。

では今度又香港からお手紙致しませう。ひざの上で書いてゐたのできたなくなつてすみません。では吉人さん、早ちゃんによろしく。母さんおねがひ。では又ね。

(二月二十五日。以上立子宛。「玉藻」)

四

御無沙汰してすみませんでした。

一昨日あたりから急に暑くなり出して、皆眞白な服装になりました。けど、お父さんだけ晝は浴衣に袴、夜は絹の著物の様な薄いもの、一人よく目立ちます。

船中俳句大流行になつて、今日これからも、ひな祭りの俳句會をします。

昨日はお父さんのレコードをかけたたり大變なさわぎです。

船中の人とは皆知り合ひになつて、とても面白いです。(三月三日、としを宛。「摩耶」)

五

皆さんお元氣でいらつしやいますか。お父さんも章子も暑いのにとても／＼元氣です。毎日お晝寝をしたり甲板で遊んだり、汗びしょ／＼になつてゐます。



イギリス人の年寄りの可愛い、御夫婦と仲よしになり、今もピンポンをして二人を負かして来ました。

二人共日本語が出来ないので實にこまります。イエス、ノー、はかしくりかへしてゐてもをかしくなりません。

今日、シンガポール、ペナンの俳句會を四時からするさうです。章子は何も出来ないのこまつてゐます。

皆さんとても熱心で感心してしまひます。

ペナシで見物してとても日本がなつかしくなりました。

何故つて、水田があり、まあ日本でいふ藁ぶき屋根があり、鶏がひよこく歩いてゐて、おまけにスコール(雨)のあとだつたので、水田から稻の香がプン／＼して來てもうたまんなくなりました。本當に其處だけは日本と少しの變りもないといへます。

ペナン見物を終つて船に歸りましたけど、兩替したお金が一ドルと五センのこつてゐたので何か買つてしまふつもりで船に賣りに來てゐる土人から繪葉書や寫眞ブックを買ひました。

土人達皆日本語が出来るんでびつくりしました。

シンガポール、ペナンで寫した寫眞お送りませう。裏に説明をします。母さんにも見せて上げて下さい。

吉人さん、早ちゃんによろしく。(三月九日)

## 六

昨日アデンを出帆しました。

丁度小兄さんから手紙が來てゐてとてもくうれしかつたです。小兄さんは飛行機でエヂプトまで來るつもりで色々しらべたのださうです。でも高いのでやめたつて書いて來ました。手紙が來たら急に早くマルセイユまで行きたくなつてしまひました。

あと九日間で著きます。

そろ／＼荷物もまとめ始めなければ章子一人でも大變だと思ひます。毎日々々日ばかりを



數へてゐていやになつてしまひます。他の人達はもう少し乗つてたいとか云つてますけど、章子はお友達もないし一人でぼつんとしてゐるからよけい早く下りたいです。パリでは宅さんの奥さんが章子の世話をして下さるさうです。そしてホテルなんか泊らないで、今小兄さんの居る所へお父さんと二人で行くと一番便利だつていつて來ましたからさうするかも知れません。ホテルはやつぱしかた苦しくていやです。船もかた苦しくて、まして夜となると皆イヅニングですから實にこまります。船でこんなですからホテルだつたらもつといやでせう。

お父さんはとても元氣です。今お晝寝をしようつて著物を著かへてゐらつしやいます。章子はお晝寝すると夜寝られないのもうやめました。でも、くせがついてゐるのでとても今ねむいで

す。  
よく夜や朝、ベッドの上で船といふ事をわすれて家のつもりで居ることがあります。そして母さんの聲がお風呂から聞えたりしてもう起きなければと思ふ事等度々あります。では今日はこれでさようなら。

今度カイロであつたことを書いてお送りませう。早ちゃんによろしく。(三月十八日)

## 七

カイロ見物もとてもつかれましたけれどまあ無事に終りました。色々のことは歸つてからお話致します。

いよゝ明後日マルセイユ著です。小兄さんに會へると思ふととてもうれしくてこまります。パリでは小兄さんの今までゐた所ですごす事にきまりました。そして夕方小兄さんと二人でマーケットに買ひ出しに行つたりなんかしみます。そして部屋は小兄さんと二人一緒でお父さん一人となります。

今度はパリからお便りいたませう。早ちゃんによろしく。(三月二十五日)

## 八

御無沙汰致しました。



無事にパリに著いて小兄さんの家へ入り込んでます。お父さんの部屋はこの家の奥さんの部屋で、奥さんは旦那さんの部屋で、旦那さんはお友達の家へ泊りにいつてます。章子は小兄さんの部屋で二人でけんくわばかしています。

小兄さんが何時ものやうにカラエバリをするのでとても面白いです。

毎日のやうにお父さんは何か書いておられ、小兄さんは勉強し、章子は言葉は通じなくても奥さんと二人で買ひ出しに行つたり、臺所で御飯の支度をしたり、フランス語を教へてもらつたりしています。まだくともおぼえられません。

先日なんて二人で活動へ行きました。もう日本でしてしまつたトップハットね、あれを見に行きました。奥さんがこれどうだつて廣告を章子に見せましたけど、もう見たつていふつもりでもいへないのでいゝとコックリしてしまひました。どうせこちらでは日本語が横に出ないから一回見てわかつてる方が面白いと思つて行きました。そして見ながらよく考へたら、これは宵子姉さん夫婦、立子姉さん、眞砂子姉さん、晴子姉さん夫婦、柏尾さんの小母様、玲ちゃん、章子の九人で行つて、あとで東京會館でスキヤキ食べたことを思ひ出し、とてもなつかしくなりました。そして廻りを見廻したら日本人は一人も居なかつたの、一寸ホームシックをおこしました。

章子はパリへ来るまでパリつていふ所はとてきれいですてきな所だと思つて来たけど、来て見てあまり想像以外だつたのに驚いてしまつたの。でもけつしてきたないのぢやないの。全然反對の黒すんだ、とても落ちついた都だつたわ。町の中を歩いてる人も九分九厘まで眞黒づくめ、本當に章子感心しちやつたわ。全部地味なの。日本の銀座みたいに色んな色の洋服を著てる人なんてないくらゐよ。日本もパリのやうだといゝなつて考へちやつたわ。

一昨日でしたかしら、佐藤さんつていふ方の所へ御飯に呼ばれてうかゞつたのよ。そのとき松尾さんといふ長い間こちらに居られる方も來られて、皆で色々話した後で皆さん俳句がすきだつていはれるので俳句會をしたの。はじめるときがもう九時半だつたので、五句だけとしてしたの。其結果章子が一番よ、うれしくなつちやつた。その上五つの中四つお父さんのに入つたの。小兄さんは三つお父さんに入つてとてもくやしがつてたわ。章子に負けたから……「春月」つていふ題でしたの。あんまりうれしかつたから一寸お知らせしました。

今月の二十六日からロンドンへ行きます。八田さんやメーヤさん（メーヤさんにはまだ



會ひませんけど）に會ふのがうれしくて仕方ありません。

さうく母さんにたのんでおきましたけど、章子の學校のこと心配で仕方ありませんからもう一度庄司先生にはつきりしたことを聞いて頂きたいのです。先うかがつたとき、一學期全部休むと三分の二、一寸かけるつて聞いたんですけど、それで一年おくれるとはいはれませんでしたわね。二學期、三學期一生懸命すればいゝつていはれたやうに思ひます。わざわざ行つて下さるのは大變ですから、手紙でもよごしますから庄司先生から本當のことを聞いて下さい。勝手なことを申上げてすみません。ちつともまとまつてゐない手紙をおゆるし下さいませ。

（四月十日。以上、立子宛。「玉藻」）

## 父娘俳句行脚

——大阪朝日新聞記者のつけて下すつた表題——

### 玄 海 灘（第一信）

横濱を出てから始めの二晩は酔つて苦しい思ひをしましたが、瀬戸内海は大變靜でお父さんの雑詠をより分けたり、甲板へ出て故郷の四國をながめたりして元氣にすごしました。

門司を出てからは玄海灘で大きなうねりを喰ひ船はよく揺れますが、船に馴れたせいか大變元氣で、夜は食堂へ出ておいしい御飯をいただき嬉しくて嬉しくてしかたがありません。日暮方から雨が降り出しました。お父さんは依然として元氣です。御安心下さい。

玄 海 の 大 波 の 上 に 春 の 雨



上 海 (第二信)

上海に著いてはじめて自分が外國へ行くのだと思へましたが、見るものや何も彼もが想像以外なのでまるで夢のやうで仕方がありませんでした。上陸してから自動車で上海事變の跡を見て廻りました。ドライブの後、本場の支那料理を御馳走になつて、日本で食べたのよりさつぱりしておいしく頂きました。お父さん達は俳句會で東本願寺別院へ行かれましたが、私は二三の方達と一緒にグラウンドシヤターへ活動を見に行き、それから日本でも見たことがなかつたダンスホール、メトロポール、へつれて行つて頂きました。薄暗い所でみんなダンスをしてゐるので入つた時一寸びつくりしました。入口のところにはとても恐しさうなインド人の頭に布をまいた人が立つてゐました。ホールにはいろんな色の風船がつるしてありました。私達のあとからお父さんも俳句會が終つてホールに來られました。一寸お父さんとホールをくらべて見て、あまりつり合はないのでなんとなく色々の人が見てゐるやうな氣がして仕方がありませんでした。歸るとき玄關のインド人が私達を支那人と間違へてなんだかわからない支那語でものをいひかけ少しこまりました。

香 港 (第三信)

香港に二十八日につき上陸して、有名な景色といはれてゐるドライブウェイをドライブしました。アスファルトで美しく出来てゐる道を、風をきつて走つて行く心持はとてもよく、上に行けば行くほど景色はよくなり、香港市街は一目に見えるくらゐになり、目の前の山には雲がかゝつて、自分もこの山の上に住みたいなあと思ひました。途中レパルスベイのLIDOといふホテル風な喫茶店へ寄りお茶を飲みました。LIDOの入口にはダリアなどの赤や白の美しい花が澤山咲いてゐて、まるで日本の春と夏と一緒に來たやうな氣がしました。歸りは自動車を歸して外人商業地とビーク住宅地との聯絡機關の一哩弱のケイブルカーで下りました。日本で私の乗つたケイブルカーとくらべるととても急で驚きました。市街を見物して後千歳花壇といふ日本料理店でしばらくぶりで日本の御飯をおいしく頂き、十一時頃船に歸りました。香港の夜景を船から見ましたが、霧が少しかゝつてあまりよく見えないのが残念でした。



二 ン 月 の 香 港 に 來 て つ じ 見 る  
香 港 の ロ マ ン ス ロ ード 春 の 雨  
香 港 に 春 雨 傘 を さ し 合 ひ て

彼南の蛇寺 (第四信)

ペナンに上陸して楠窓さん、父、私の三人が案内の方の自動車に乗つて見物をしたのはもう五時過ぎてをりました。蛇寺へ向つて行く途中の道は、椰子、イースタン・ツリーの繁つてゐる大變美しい田舎らしい景色が続いてゐたり、マレー人の床の高い家が並んでゐたり、支那人の家が並んでゐたり、大變面白いと思ひました。また日本の田舎と變りない水田があり、そのそばに英語でニツパといふ椰子で屋根をふいた家があり、鶏がそのそばにはなし飼ひにしてあつたりするので、本當に日本がなつかしくなつてしまひました。

蛇寺は名の通りのお寺で、お寺の中を蛇があちこちでヌル／＼してゐました。楠窓さんと父は平氣で中へ入りましたが、蛇をいやだと思つてゐなかつた私がとても入れなくなつてしまひました。

た。

蛇寺を出て極樂寺といふ支那人のお寺に行つたときはもう大分薄暗くなつてゐました。四つくらゐに區切られてゐる長い石段を昇つて本堂を見物しました。その階段にのぼる途中、日本の銀座の夜店のやうなのを出していろ／＼のものを賣つてゐました。その店の人、また本堂の山の上から野菜を籠に入れて天秤をかついで來る人達が日本人にあまりよく似てゐるので驚いてしまひました。

極樂寺を出て植物園に入つたとき、たうとう眞暗になつて猿も瀧も有名なものを見ることが出來なくなつてしまひました。それから海岸にそつて町に出て、ペナンの銀座と稱するところで一寸した買物をして八時すぎ船へ歸りました。兩替したお金が少し残つてゐたので、船に上つていろいろなものを賣りつけてゐる印度人から繪葉書や何かを買ひました。その人達が日本語をつかふのには一寸おどろかされました。日本、ステツキとかヤスイとか五錢とか……そして船は十一時に出帆しました。



マラツカ海峡 (第五信)

今夜御飯がすんで皆甲板を歩いたり社交室で蓄音機をかけたたり、私のやうに手紙を書いたりして居ります。船はそろ／＼二葉亭四迷が死んだり、佐藤次郎さんが飛びこんだりして魔の海と船の人達が呼んでゐるところにさしかゝつてゐます。美しくて海でないやうな感じ、こゝで誰でもが一寸飛びこみたくなるのださうです。

空は恰度十五夜のお月様が輝いて海にうつるその景色はなんともいへない美しさで、まるで寫真か畫のやうです。お星さまも日本で見られないやうなのが見え、キャビンに入ると暑くて仕方はないし、誰もが夜おそくまで甲板や社交室で涼んでゐます。

ムードン吟行 (第六信)

四月十二日の日曜日、パリに住んでゐられる日本人の方達三四人と、父と兄と私で十五分ばかり

し電車に乗れば行かれるムードンといふ田舎の森へ吟行しました。少し曇つてゐた空がだん／＼黒くなつてポツ／＼やつて來ましたが、雨かと思つたら霰で、四月にこんな珍しいと思つたらフランスではとき／＼あるさうです。小さいサロンの前で自動車をとめて霰のやむのを待つてゐるうち、持つて來たお辨當を食べました。オムスビヤノリマキ、サンドウキツチなど出して食べるので、まはりの外國人が不思議さうに見てゐました。森には枯葉が一杯落ちて土が見えないくらゐになつて、その上には若い木の芽が一杯出て美しく、霰が降つて濡れた後に日が照ると、なんともいへないよい香があたりからして來ました。また降り出すとサロンに逃げこみ、サロンを出たり入つたりしたので相當つかれてしまひました。

もの 靜かに 花に 情話や はばかり 虚子  
木の 芽茶屋 春の 霰の にぎやかに 友次郎  
堇 摘む ムードンの 森の 記念にと 章子

(大阪朝日新聞)

71  
1



## 歐羅巴の流行・人情・學生など

最初に行つたパリは「流行はパリから」などといふことを聞いて、どんなのかしら、東京などではまだとてもないやうな洋服を着てゐるのではないか知らなどと相當いろ／＼と考へて行つてみましたが、行つてあまり東京と變つてゐないのかへつて驚きました。しかしよく聞いてみるとパリの人は自分々の顔、姿を考へて自分でそれに合ふ形をつくりその洋服を着てゐるのださうです。それを洋服屋が見てよいと思ふとそれからいろ／＼考へて流行にするさうです。その流行が日本にもイギリスにも方々へ行くさうです。そのことを聞くとあまり日本がおくれてゐないからといつても威張れません。日本も自分々々で考へて作るやうになつたらどんなによいか知れないと思ひました。

次に行つたドイツでは洋服の形など別にどうでもよいといつたやうで、だん／＼短いスカート

がはやつて来たといふこのごろのことはおこまひなく、足クビくらゐまである洋服を着てゐる人も少くありませんでした。どこを見てもなんとなく質素を思はされました。ロンドンでは別に目につく様子をしてゐる人もなく、東京とあまりちがつてゐないと思つただけです。

外國人は表情動作たつぷりで、日本人のことを無表情の人間だといつてるとか聞いてゐましたけれど、本當に、特にフランス人は表情動作がたつぷりしすぎるくらゐあると思ひます。パリに三週間ゐた間ごく少數のフランス人達とおつき合ひをしましたが、あんなにまでしなくてもこちらにはよくわかるし、なんだか少し下品みたいに見えるから、よせばいゝのにと思つてしまふことがたび／＼ありました。ベルリン、ロンドンではあまりそのやうなことは思はずにゐました。

パリではまるで大學生も中學生も女學生も小學生もゐないやうな氣がしました。日本に歸つて學生のなんと多い國かしらと思ふくらゐ、あちらではどれが學生だか少しもわかりません。男の學生さんは大抵ベレーをかぶつてゐるとかパリにゐる方にうかゞひしましたが、女學生は全然わからず、唯年でこの人はまだ女學生だと思ふくらゐです。

ベルリンはそこへ行くと校服のやうなものもあるし、日本のやうに皆肩を並べて歩いてゐるからすぐわかります。ロンドンもオックスフォードあたりへ行くと盛んに歩いてゐました。またイ



トントン中學はシルクハットに燕尾服の校服で、十一二歳くらゐから相當大きな人まで全部同じ様子をして歩いてゐるので、一寸日本の少女歌劇のやうです。

この三つの中では一番ベルリンが學生らしいですが、日本の學生が一番本當に學生らしく見えて感じがよいと思ひます。(大阪朝日新聞)

## 港

### 上 海

黄浦江に入つてだん／＼兩岸が近くなり、工場や廣告板がはつきりと見え出して来て、はじめて外國に來たとわかるやうになりました。

箱根丸の左右にはサンパンと呼ばれてゐる小さな赤や黄色の舟がせはしなく揺れながら遠くへ行つたり近くへ來たりしてゐました。いよ／＼港に著くと苦力が雨の中に平氣で立つてぼんやり

船を見上げてゐたり、きたない荷物をかついだりしてゐました。

私達が船を下りたときは又雨がひどくなり、待たしておいた自動車が急に見えなくなつたりして、苦力たちの休んでゐる所へ雨宿りをしながら方々を眺めてゐました。苦力達は父の和服姿を不思議さうな顔をして立ちどまつて見てゐる人もありました。

### シンガポール

急に暑くなり、一週間ばかり前、外套を着てゐたとは一寸考へられないくらゐでした。

港に近附くと遠くの方に長い／＼椰子の連つてゐる岬の様な所が突き出てゐて、熱帯に來たといふことがはつきりわかりました。

眞青の空にもく／＼雲が湧き出てゐて、其下の方に椰子の小さな影が見えるのは何ともいへない美しい景色でした。

### コロンボ

暑さにも馴れて、防波堤の波で有名なコロンボに行き著いた日は運悪く、珍しく波が靜で一つ



も波が打上げてゐませんでした。

唯、セイロン・フォア・グッド・ティールと書いてある看板だけが目についてゐました。

ヨーロッパからの歸りのコロンボに寄つた時は夜でした。遠くから燈臺の光とセイロン・フォア・グッド・ティールと書いてある看板のネオンサインがよく見え、なんとなく懐しい感じがしました。

近づくにつれ、家々の電氣が美しく見えてゐましたが、眞黒な山のやうなもので電氣が見えなくなり、よく見えますとあの有名な波のしぶきで、防波堤にぶつかつては高く上つてゐるのでした。

防波堤に入るとき燈臺のそばを通るとはね上つて散る波のしぶきが船の中に居る私達にはねかかるくらいでした。

## ア　　テ　　ン

木といふものが一つもない砂漠の中にゴツ／＼した山が遠くに近くに見え、一寸こんな所が世の中にあるのかしらと思ふくらゐでした。

## ス　　エ　　ズ

スエズも又砂漠の中に家が建つてゐる港でした。そこはアフリカとアジアとの境目でした。其所から自動車に乗つてカイロに向ひました。カイロ見物をすませてから汽車に乗つてポルトサイドに行きました。船はそこに來て私共の歸るのを待つてゐてくれました。

ポルトサイドはもう地中海です。

## マ　　ル　　セ　　ー　　ユ

ヨーロッパの始めての港で私達の上陸する港であるのでどんなに待たれたかわかりませんでした。ヨーロッパの港であるからどんなに美しいかと思つてゐましたら、あまり美しくないきたないと言へる位の港でした。働いてゐる人達も皆西洋人で一寸不思議に思つてしまひました。兄がパリから迎へに來てゐる事になつてゐるので、甲板の上から見付けてゐるとなか／＼見付からず船が殆ど港に著く時分、下の方を白つぽいレインコートを着て手をふりながら歩いて來る兄が目につきました。(ホームライフ)



## ビュルガさん姉妹

ベルリンで父が俳句の講演をしたとき、ドイツ人と日本人が半々くらゐ集り、熱心に聞いて下さいました。其とき多くのベルリン大學の日本語科の生徒さん達が来てをられ、女の生徒さん方も四五人居られました。其中にジャンヌ・ビュルガさんと、イヴォンヌ・ビュルガさんと云ふ二人の姉妹が居られ、講演がすんで後、お菓子を一つのテーブルで偶然食べる様になつて、紹介もされないのにあまり日本語が上手なので遂平氣でお話をしてしまひました。

妹さんのジャンヌ・ビュルガさんの方が日本語が上手で、ちつとも日本人と變らないと言へるくらゐでした。

ジャンヌさんは日本に來た事があつて一年半位神戸に居られ、去年歸つて來たのださうです。たつた一人で行つてきましたが、日本で盲腸をした時だけ心細くなつただけで、後はなんとも思

はなかつたと云つてゐられました。

そして又日本に行きたいが、この六月の末に日本語の試験があつて、それに及第したら今度はお姉さんと二人で行くとお母さんに云つてあるけれど、ゆるして下さるかどうかわからないと云つてゐられました。

この様な事を全部それは／＼うまい日本語で云はれ、本當に驚いて、自分がフランス語も獨逸語も一言も話せないのが本當にはづかしいやうな氣がしてしまひました。

又この時一人の男の學生さんと、巴里から父について來た兄とが日本語で色々話してをられ、父の講演を演説と云つてゐられたので、兄が講演と云つた方がよいと教へてあげましたら、大變喜んで、私もきつと日本に行きます、そして日本語がうまく話せる様にする、と大變熱心に云つて居られました。

この様に此所でドイツの方達と仲よく本當に親しくお話出來た事は私の今度の旅行中一番うれしく本當にわすれられない事となりました。

翌日日本人會で俳句會がありました。ジャンヌさん姉妹と、も一人他の女學生と一人の男の人（日本に一度來た事があり相當な年輩の人）と四人の獨逸人が其俳句會に混つてゐました。私とジ



ヤンヌさんは並んで日本食を皆で一緒に食べ句會に移りました。指を折りく字數を數へて俳句を作つてゐるらしかつたが、ジャンヌさんの句は

木の芽出でざれど寒さまだ身にしむ  
春風に當つて泣く薄著の子かな

といふのであります。

最後にお別れする時、日本から持つて來た小さい豆籬を、ジャンヌさんと、イヴォンヌさんに上げてこの機會をいつまでも覚えてゐて頂くためにしました。

その翌日、私達はロンドンへ行くために、ツオーの驛から發ちました。その時、ジャンヌさんとイヴォンヌさんはわざ／＼送つて來て下さつて、私に可愛いお人形を下さいました。

そして又日本でお會ひする事を約束してお別れして來ました。

今丁度六月末で日本語の試験をしてをられるでせう。この夏頃もしいらつしやつたらどんなにうれしいか、その時の事を考へて楽しみにしながらお待ちしてゐます。

ロンドンで開かれたペンクラブの會には私達は横光利一さんと一緒に招待されて、夕方その會場のホテルへ私は振袖を着て、父、兄、それから三井の支店長さんなどと一緒に出かけました。

會場には色々の國の人達がそれ／＼美しいその國の著物を著て廣間に立話をしてゐました。私達も其中に混つて、紹介されたりしながら、やがて食堂に入る時間となりました。漸く少し落ついて見るともなしに邊りを見廻すと、日本人の女はたつた私一人だつたし、何となく責任がある様な氣がしました。(婦人公論)



71  
1

版  
所  
有  
權

昭和十一年八月十四日印刷  
昭和十一年八月十八日發行

渡佛日記

定價金貳圓

著者 高濱 虛子

發行者 山本 三生

印刷者 青野 仙吉  
東京市芝區新橋七ノ一二  
東京市芝區田村町四ノ二

發兌 改造社  
東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替東京八四〇二番  
電話芝(43)一一二一四番

(兩角製本)

(刷印所刷印野青)



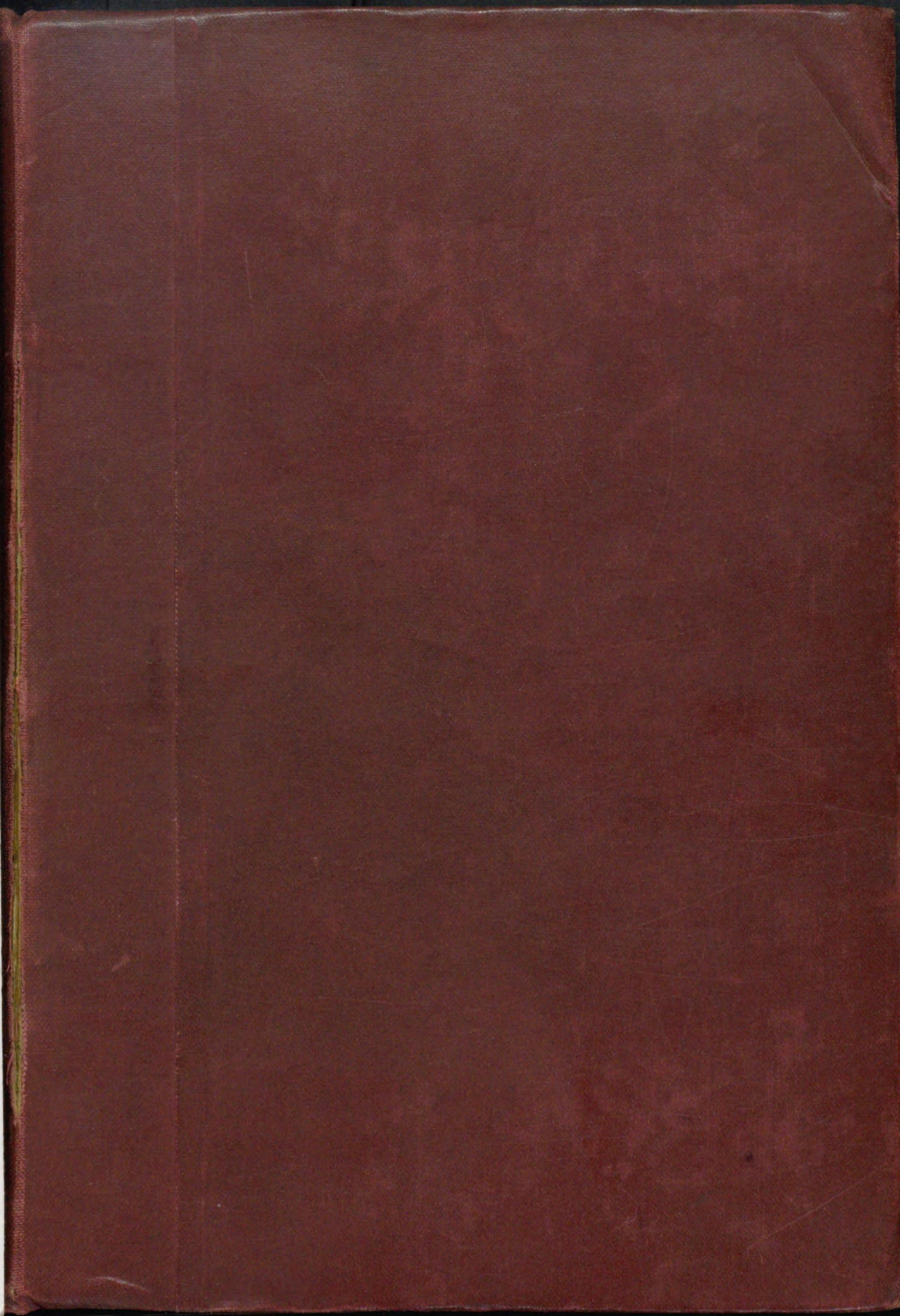
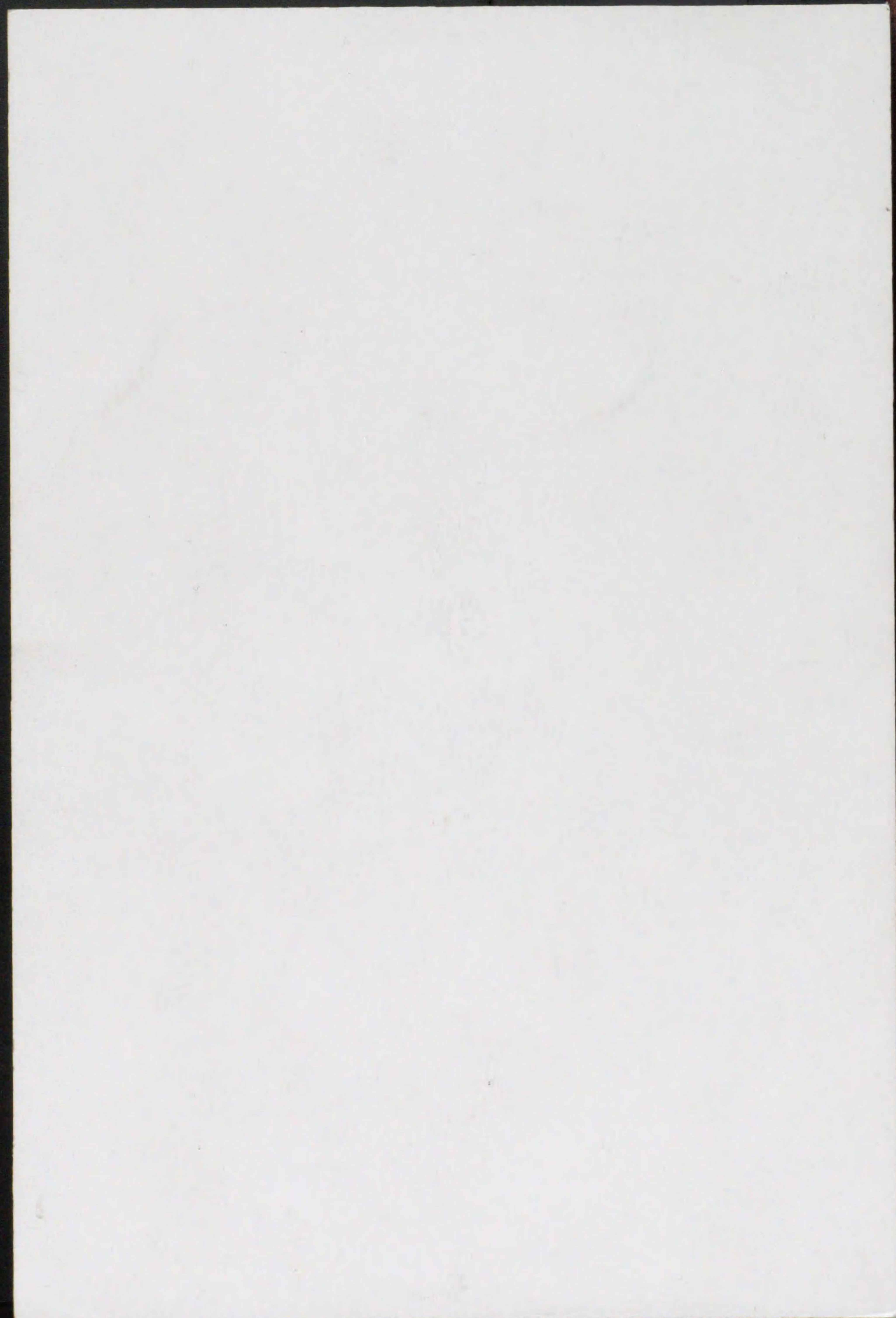
71  
1

高濱虛子著	荻原井泉水著	改造社編	改造社編	正岡子規著	改造社版	改造社版	改造社版	高濱虛子著
句集虛子	梵行品	俳句日記 (每年十月發行)	俳句季寄	子規全集 (全三十二卷)	續俳句講座 (全八卷)	俳句講座 (全十卷)	俳諧歲時記 (全五卷)	高濱虛子全集 (全十二卷)
定價六十錢 送料八錢	定價一圓八十錢 送料十二錢	定價一圓 送料八錢	定價七十錢 送料六錢	定價各一圓 送料十四錢	定價各一圓五十錢 送料十四錢	定價各一圓五十錢 送料二十一錢	定價各一圓六十錢 送料十四錢	定價各二圓 送料十四錢



713  
125





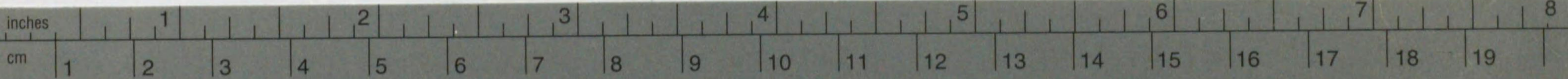
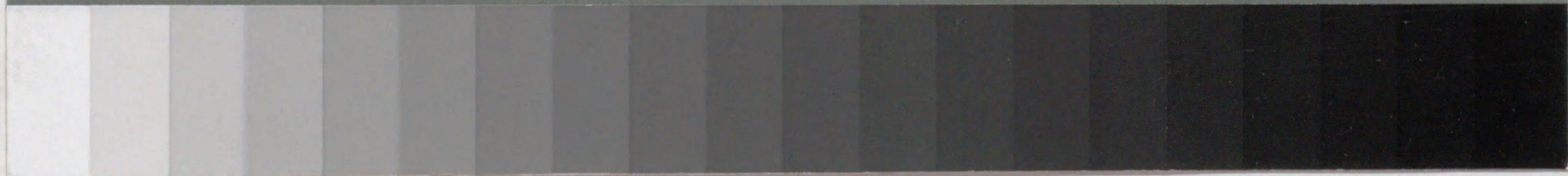


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

